

初蛙前篇

硯友社史

丸岡九華

編



本間文庫
文庫 14
A123



初鞋

九周九章

多々〜 礎友社多々、一個大園紳也、

此聖代小社互学也前其多々、古時在文博不

一筆秋成致り凡、其追乞成追想す、今上

りは二章、明治十八年の著書中かの

中、東京大学及今大学録備

中、此回開本学校の念れ後成りけり、

今神田一

ツ格外高専書業学校の向側より、

左録

備前、不捨、

自、

一
段



二下

市の上をちり

因りつふ是子りり以考以以十六年の凡

自分か業延しを

文友会あるもの成組織し

前田香縁、川澤徳堂、山崎洋水、川

井屋まむ、毎月一冊自分が徳川の定り集

り集りて、群衆の詩文成批評深削去、それ

成はま九一十冊子とし、金魚の田原子供

世下動説にりり、此折あ時、終介る也

尾崎と、金魚の盟者、若竹長崎は縁

学校は原高寺多業子校に在り

玉波多我佛語轉知友小之我順之ゆり

尾崎とは是地所町、居住せ、以事れ也

友業、前記の二日代、学校もて、以

交尾崎少田石持三人、るに文章研究の爲め、批

語、各自子弄稿し批評し之身外

たしを心、居、

是非替わしを、未之是れゆ、の語、元

以之面白、其日子持の

二十行 下谷車

尾崎が下谷車、此日三崎町の石野

山と号し、甚だ此所の八書地蔵本は高し
石川鴻高の~~...~~研考也

入る後には自分も此の~~...~~五二

研鑽成ありたり、此の~~...~~一年半

故に~~...~~組

度~~...~~の~~...~~

経~~...~~の~~...~~の~~...~~

雨~~...~~の~~...~~の~~...~~

古~~...~~の~~...~~の~~...~~

二十行 下谷車

是通年~~...~~即ち~~...~~

「空~~...~~の~~...~~の~~...~~

会~~...~~の~~...~~の~~...~~

修~~...~~の~~...~~の~~...~~

は~~...~~の~~...~~の~~...~~

因~~...~~の~~...~~の~~...~~

一~~...~~の~~...~~の~~...~~

随~~...~~の~~...~~の~~...~~

市~~...~~の~~...~~の~~...~~

初令よーとるに片驛場と申すは、今更
去るは、考輩又の爲め小場所ぬ今更
重すは、ゆ何と在る共、日暮里より
いりも里敷有る、拉暮の御雨雪の時不
心、考輩の乗は出陣時程より、身
時より片驛場、考輩の乗は出陣時程より、身
今も無之は申す、今より片驛場
考輩の乗は出陣時程より、身
之處より、今より片驛場
考輩の乗は出陣時程より、身

十一行 下谷車坂、世政

處、日暮里より片驛場と申すは、
考輩の乗は出陣時程より、身
今も無之は申す、今より片驛場
考輩の乗は出陣時程より、身
之處より、今より片驛場
考輩の乗は出陣時程より、身

此處は考君より、
考輩の乗は出陣時程より、身

此ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ
是ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ

八月四日

芝江神明所ハ事地荒事ナリ

尾崎徳孝印一區

丸岡久之助様

此ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ
是ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ

此ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ
是ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ

此ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ
是ノ事ハ是ノ事ナリト申シ替々申シテ

白分

二十行下谷車板はせ改

合道一々、神田三所所々、尾崎が下宿屋石野
市ノ此ノ事ハ、石野と申合セテナリ。

ナリ事奉たぬ、面白お話、
ナリ事奉たぬ、面白お話、

ナリ事奉たぬ、面白お話、
ナリ事奉たぬ、面白お話、

ナリ事奉たぬ、面白お話、
ナリ事奉たぬ、面白お話、

ナリ事奉たぬ、面白お話、
ナリ事奉たぬ、面白お話、

陽日、一冊を成難法師の編纂と云

稿合志化 **目** 覽り世志、その編纂は少田辰崎二

人を引寄せ、**田** 用算の陰に批評 **勝**

年乃、**一** 一の事と云ひ、さうに **勝** の向

題と云ふに **種** 之 **の** 漢 **通** たる **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

文章の **總** 考 **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

社名 **出** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

社 **名** **出** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

二書 **附** 録 **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

小説権威 **心** 織 **筆** 揮、**敵** 文 **新** 所 **詩** の **新** 成 **十** 葉 **葉**

紅、**狂** 歌 **川** 柳 **筆** 揮 **飛** 流 **落** 葉 **と** 云 **而** 白 **の**

と云ふ **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

今 **も** **十** 一 **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

ち **上** **下** **人** **事** **成** **言** **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

入 **心** **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

か **を** **難** 法 **師** の **必** 考 **以**

社印は **鉅** 筆 **亦** 久 **我** 子 **二** 信 **託** し、**揮** 墨 **仕** **士** 隆 **後**

三 **三** 即 **ち** **為** **所** **秘** 備 **門** の **学** **生** **二** 流



我々文庫一

頁八十八

抵し、是の如きことより一往
 然して此處迄者進み、
 素島夫、花紅次史、
 明・綴山と記し、
 山田武左衛門、雨音と
 石橋卯三郎、桂堂キルは梅の舎堂
 其れ自分の事なりと、
 石橋が思ふ所、少田が美妙齋、
 孝と改めたり、其後半年、
 平あり

十行

一

8 (新)

行、文師の著書の子(附録)の
 行、文師の著書の(附録)の
 山と号す、と三人連山、江の岸、
 舟、其れ此の所、
 舟の仲、午島、物、
 舟、其れ此の所、
 舟の仲、午島、物、
 舟、其れ此の所、
 舟の仲、午島、物、
 舟、其れ此の所、

中頁
中頁
中頁



我多文庫一

抵し、是れを以て...
素高夫、花紅...
明、綴山と記...
は少田武左郎、雨香と...
は石格即三郎、桂堂...
は自らの...
不格が田舎...
孝と改め...
華さる

東西、開化、御代、不約...
我多文庫一
我多文庫一
我多文庫一

我多文庫一
我多文庫一
我多文庫一
我多文庫一

8

我多文庫一

かくて...
半切...
田が...
ワド...
せもの...
池の...
の...
行、...

著す、待ちまぢし甲斐ありて僅二三日向
の約あり三四回の談、面面白しふくむ
事たふとは逢ふ方の挨拶、又又座を成すも
けふの時の心持ちりり。初一書たりり
ハ者キ心、尾崎山田二人を筆耕せしもの、
今も尾崎より礼儀あり著す。今古の初号
と掲げたる尾崎が披露の文。山田が綴りたる
祝文、幸々送るべき可しむ。記して古の
文飾也。

我書多文庫の披露

二十行 可谷車屋世記

六字

撤して曰く是ナト大業、又又集りはヤ
、艶めく、則ち書て以て才子諸君の書ま
つる。それ人各果しむ可し。隣の壁を
燈火監み、書讀むも果あり。銅臭の毒
ふ守銭奴、一筆の倉子筆足るとする清貧
家も、亦果むとありきか、うすまは、似極
の疾に家藏の雨漏り顧みず、何れは二合
半の梅酒に即袍及打袴して、龍龍を派つく
るも亦罪障のゆかりなり。予の隣に
壁ぬりたる虎成啼ふ、此れなきと云ふは、銅銅

身きはちびあき、
こぼりえ病々延うむ、
の雨降り玉まぐ、
めす、
は思葉のいばあや、
不善はちまめ君子等也
歌詩五七上京より
四面に望み角取
氣一切無差別業集め
りあり
詠虎も我も母多き
雑詠成日

二十行
下谷南校せ成

編りて、
是れ天下無上性果、
の君達 珠玉成宮を秘め玉けは
人うふくとのなま
人うふく。
明治十八年
柳翠花紅梅の
羊可通人
自鼻
自刻了自母の印成橋す、
少田の程まは吟のり

我身多文津登意の祝辞

終日机子も所毛、大層迄まど腦力成第す
るやれ等の身よりまは、所謂る牛は牛
馬のそれお程お身ながら、うすやはどを、
山鳥大尾崎のしと不捨のうしと二人壽
合て叩きせ志一政おしるがりま介小生尔
推しせん、社毛とまうばすか、ばらるん、
按玉推地たらすとも、その我身多のそれ
而目る牛柄の岡持るお身けの新居前ゆを
つけ小、おるといふはどびざんすし

下谷車路登意

言けしと見れをあつちも亦、下地は好ふ
上両意はすし、あうはは及北血棄ふ、祝
辞一年まわうせむ、おれ何よりむかすけ
むと、思くと思ひおはあを、少田梨征
の初陣と、酒後了も手傷は此まぬと、後
午さうの一香鑑、つけられるのか口惜し
ま、まし、何まか唱海源、うの水月と言
ま、ま、午より取れるぬま、鑿目言葉、イ
ヨ而祝と言ふが、具多も祝辞と見え
中河の、祝辞も祝辞も大祝辞、大走くじ

りと見ゆはナク

榎井 鞋服

履の自刻は自身を對し、山田も近年靴は

矢の刻印、テカ **■■■■** も見るよし

斯くして一冊とて社を一人うけつて、**■■■■** 三

限、エガ 善平 **■■■■** 善子満ちぬと云ふは、離す 榎外

二 **■■■■** 什家 **■■■■** 信長 愛人 **■■■■**

■■■■ 思つは、カ 吟をすけの筆も、カ 吉印 **■■■■**

眞面目な、カ 鞘跡はたゞ信長が宝、血を見す

くは、カ 少きうき カ 決心、カ 一の例とて記憶す

十行 下谷車 榎井

は 自分の鞋服を新脚法を総評して、意を

通せ、カ 斬つたるは、カ 元鬼とて **■■■■** 子が答

弁 **■■■■** 左に新法は古法多く、カ 殊に「旭次

と秋) **■■■■** (志多の風) カ 平の詩は用ひ

た心、カ 評者は **■■■■** 全篇は辭一に収り

ちうと、カ 熱は減も甚し、カ 一つが、自分の

詩 **■■■■** 用ひ、カ 一つ、ルさせると唱へて(中)の

詩 **■■■■** 少田は其の詩の創造者は馬蹄不

以 **■■■■** 依託はうと、カ 北の轉化すは、カ 移め

無 **■■■■** りとの、カ 其の詩の自分成の作者とて

馬場（見）鼻柱（一段）折つてく

と、此法（見）の創設あり

曲錦本（見）は左綴りきりくすつて

とある（と）と一は

曲まを（見）なり

下園（見）と一は

あるは（見）なり

と云ふは、是亦大直

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

子と云ふは、子人

十行

机成並く朝の吹雪を文筆は汚しけり

その水も多様の成績をいざざりしは不田

後より 午後三四日 〇〇 辰崎は今の視

又荒本々の短田所三丁目 〇〇

〇〇 引移り 〇〇 此處は今

の皇典講義所の横所を 表の 〇〇 格子戸は

と違ふはソレも撞午の露は口より 〇〇 裏本戸は

リを 塀越し 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

ふ。 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

三畳の一間、一尺ばかりの濡い椽の側は机成

南向き、机く、室内中日書、障子横長短冊

古摺物類、〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

障子洋燈の公屋、〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

標側、〇〇 雨落へ片近、〇〇 〇〇 〇〇

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

十二の近くを、〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

怪鳥空渡返 山氣吹衣七月寒

古意雜詠

鏡亭無情耐恨多 綺意分年泣嬌娥 升雲

靴之霜堤途 輕載垂紅墜殘夢足

失題

多恨多情骨半銷 阿誰入夢度晴窗 新陽

門外垂楊柳 閒任春風弄細腰

為後狂吟

自覺憔悴鑄平顏 身在羊生羊死間 若便

當時終我命 今朝應踏死去山

持見初春描物描物賦去放題一絕進上

劇雅堂主人

於山立後面相伴 熟想此非豐園坑 戲寫

似顏誰獨悅 奈何最負婦人愁

紅葉一語成石川鴻為先生之學以 最後

了福口有劇雅堂主人之句 即古松園綠芬子

了之句 古時 存備內の 生 了 之 常

二画成以之 終世 之 心 十のハ 中 了 也 其

和筆成揮以 存 了 子 劇成如 了 一環

三点头と名付 了 之 了 了 の 了 了 了 了 了 了 了 了

二下字

得たるものあり 其引札は左の如し

小向物南華寺披露

花のそ移ろふ少所紅は 婦三人市北花化
 振ふちふくは 紅梅錦と教と 細工紅は
 お防ちぐん市北お目覚まかあふ 良足
 はたむすの衣の限るる 年奉北片ひぬ
 きあろけ おろしや臺北撃鳥は名し夏砂
 の鶴とさ北片の養井所るる 福徳屋のあ
 るじちんがや所紅るる名する 馬つき
 肌もえ通るとする 白粉すま 里野七野ま

俳優の他身成作、
 之我奉書指、
 不知人二配をり、
 詩はるの指物、
 中のろろを、
 其も所屋崎の筆を
 り。まはまの蜀山人が百人一首もろりの狂歌
 短卒一冊お午卒と一を学成、
 其後自身のろ夫
 ろと身成せり
 我身多文庫を引後、
 屋崎は引野ろろ一は
 渡ぐろろおろろを引野紅屋の引札成作を
 り。是れ子が筆成、
 其引札は左の如し
 又
 初より報

十伽羅花 酒 其地法多根掛に川水と掛
 直多く 強^レ之結花細き利^レ之喜^レ引^レ也
 種々花金銀管は 風流新形成^レ者^レし 蝶
 多^レ編^レ之似^レ合^レ之花^レ之^レ也^レ 此^レ華^レ美^レあ^レれ^レ也^レ
 鉛^レ竹^レ形^レ之^レは^レ人^レ柄^レ之^レき^レ驚^レ甲^レ花^レ中^レ美^レ之^レ至^レ之^レ也^レ
 之^レす^レて^レ其^レ直^レ之^レ高^レ之^レ多^レ之^レ也^レ 并業
 其^レ目^レ之^レも^レ 斑^レ紋^レ極^レに^レ達^レ之^レ以^レき^レも^レき^レら^レん
 お^レ水^レも^レわ^レる^レば^レい^レく^レと^レ 遠^レ近^レす^レりの^レあ^レ履
 以^レて^レ新^レ之^レた^レん

日本橋区喜井町

紅屋茂右衛門

開業日 九月 日

書百庫集進之竹文

約^レ半^レ成^レ半^レ切^レの^レ法^レき^レ本^レ板^レ指^レ
 筆^レ科^レま^レを^レ ^三の^レ苦^レ心^レ ^之 ^之 ^之 ^之 ^之
 三個、 然^レも^レ大^レ考^レ約^レ之^レ ^之 ^之 ^之 ^之 ^之
 は^レま^レな^レあ^レの^レ脈^レは^レな^レか^レる^レ ^之 ^之 ^之 ^之 ^之
 業^レの^レ後^レ移^レ本^レ ^之 ^之 ^之 ^之 ^之
 之^レ筆^レ墨^レ之^レの^レ ^之 ^之 ^之 ^之 ^之
 少^レ田^レ辰^レ之^レの^レ二^レ人

三六

下子
六

のまゝ 養年収めり くらり居たり

書生北歌

縁山

士卒の夢

春西舎量

路島幸断頭台

全上

佛國革命歌

全上

りプロフコ、ウインクル

全上

陽田川花見

蛙能

行燈

全上

巖景大和魂

全上

乙川友右門

全上

り居たり。 吉村まゝ山田^下 養年^下 全上

新詩の向うは張るを見ん。 展所自分と三

人屋右へ。 十三年の七月^下 新詩詩歴^下

り山丹子^下 養行^下 是れ三人の作が分る

角^下 活字とまゝ 一冊也書籍とまゝを公^下

世の夢^下 たり 初一篇^下 名寺田出六十

我々の学移轉^下 得たり 此書夢外^下 世の好

評或博^下 一 復今^下 世も少佳華の唱^下 一歌^下

幾幕^下 たり すと すと 鳥合の勢^下 たり たり

一篇^下 山田が以養年^下 乙卯の世^下 たり たり

下字

流子權の言のこさえと	世の人の道心路も	若葉は雨を深みどり	櫻はいつの散果て	諸葛も昔書生をう	逸めよ君は廊の君	千歳は童く切結ふ	相籠り提つて眠枕
		深き木蔭にけりや		隈田川 (露の雲の霧)		まんのけを志北下	雑の群を鶴と成

下字

腹は針さし壁裏ち	善つ、馴る、敵を	矢井の雲まゝを	たて、作かたき志	親き人と午夜布ち	花の都よけと遠し	頼一親也勝れ去り	若戦も徹す桑の弓	昔葉の空に遠くと	いつくは錦を綾錦	千字書てきた葛書
江と九篇あつた。	然しを屋脊が紙所詩本	生の組と鳳鳴会の存り	篇あるのみを参考	書生歌	花の都よけと遠し	頼一親也勝れ去り	若戦も徹す桑の弓	昔葉の空に遠くと	いつくは錦を綾錦	千字書てきた葛書

三下
6
10

左の人名あり	紅葉山人	田夢外史	雨香	雅耕鞋舩	喜重九草	杜田高橋草
屋崎樓亭印	乃持如三郎	少田武彦郎	少田武彦郎	美妙高	お宗久一印	上澤三之印
印刷子付	北条宗時	北条宗時	北条宗時	北条宗時	北条宗時	北条宗時
北条宗時	北条宗時	北条宗時	北条宗時	北条宗時	北条宗時	北条宗時

折しも昇る月の影	少田は前記の新評話	一四長巻	世一知	屋崎は遠子	思葉子	明治十九年十月
少田は前記の新評話	一四長巻	世一知	屋崎は遠子	思葉子	明治十九年十月	社説
少田は前記の新評話	一四長巻	世一知	屋崎は遠子	思葉子	明治十九年十月	社説
少田は前記の新評話	一四長巻	世一知	屋崎は遠子	思葉子	明治十九年十月	社説

二下
六
二二

狐狸窟中人
久我順之助

舌結情史
前田右印

梅屋文江
松田 印

劇相堂緑芽
松岡

名後雅仙
松波正之

瓢亭本雲子
池田監右衛門

誰子
澤田照吉

拾玉生
西院 義之助

柳園
中村 忠
川上 亮

進少人

巖谷 季雄

吉丹僅小拾七頁此小冊子存小とも 残のさき

折半仕奉り 初めは板止お製奉りのとい

上面倒 妙奉とさき今と老鳥とさき今とさき

差廻り 紅雲が祝文何

ホ、子文子とあしやう 賤の女何り

少蔭也 極其おと他めけの案と 紫人お

朝下夕ふすぎ げり子さうむるのし知人

もあふて 身きまの春は過さ けり

りりの都人の香を去るひ事と かに

23

山更に老朽人よりは
 とき部へ行きてつ
 ま定めよかゝるど
 様々と言ひすべし
 斗ふ乙女とるれく
 言はる可成り
 夕地しと 右情水小水鏡志
 整とち整振
 り取揚也 紅葉の錦打まらひ
 今日日部
 りえおらゝ あら色風雅男たち
 女心
 さそよ水夢也あは濃やうあ
 文とも井出
 の下廻とくく

籬の菊のあきまらふ雲月
 のまらうた

紅葉山人

り

りけちのとき 行 紅葉山人と
 は十抄年長夏氏 雅言 改めたるもの
 一の巻中 紅葉が 傍紫思辨美 鞋履
 の嘲戒小説云約 思事也春宵綺活花曆 香縁
 の雨々風々夜日支 自らの執師待ちか行
 候紫思辨美とよ 卯らの節書哉 眩眩し句
 西後本師と書行 たるもの 嘲戒小説云約
 は 古時 集 大志 が 自作也 世 洋上懐 を 途
 市もろ白土風呂委播行 たるもの きりく 軍つた
 とももの 思事也か 以は素路通る 花月友の漢

のぬく一イヤきたりきりた(金銀は喜成
 たり眼はきり 何ぞ扱去りどの境界もれ
 正 強直手能成江つそおせとらふまらう
 ねど 喜生れ自分び十幾けた金くかひ
 きたるうたか コレハちし言聲とも不
 覺 かつるふ睡らは物便松枝ち細言も而
 前るこのたまは守りも ぶアト展屏のマ
 うたのちか仕あうえ 胸中つてまき語ら
 けよ 野暮る他人がきりし所為は 毛虫
 と暮らまらうい睡りき

ア、友宮氏日今年我も金銀の者程は 楯
 の葉陰ふ雨もりえ 真まよたん守あう果
 のボロフポくくく (ナンノ事だり千口
 小モりかうぬく) 紅名刺も通ふはそ位か何せしや コレモ
 喜州はるし ア、世の中の手しあるあは
 日と村雲花よはあうし ハテ何とせし
 ぐう期がうがいたア 新年諸野の愛うつき 吉面淡味名事あり云
 向古事陰日者う友待人言

名とありて 昭々たる振て 〇〇〇〇〇〇

と事なよ。 紙の心成 揚思工 〇〇〇〇〇〇

大上四人を居たりす 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

芳菲少人の赤卒の筆初め 紅葉の双六と初縁

煙波少人の老人の若水 思葉の花街の初鳥

夢らる 其中一二成示せば

質屋七座開き 美妙高主人

如何什麼文庫は又の庫 質屋の庫とは同

眼ある 寄来る 投書の数多き 世尊北暮

録も何ありし 移奉所の指も及りす 〇〇

うく 是を觀す心を 畫工に 〇〇〇〇

畫工は没のシの 〇〇〇〇 〇〇〇〇

と八月成待たり 〇〇〇〇 〇〇〇〇

其く掲げて世の示す 今日よりまゝの扉成

南まて 草槽那成勸誘し 名利成細く

衆生成かゝり 置き来り人成松竹成餅成

き言華は瑠璃成北真律 不立文字の教成知

うは 須らく心田真如成月成文摩羅城の

外に曝せ喝

老人の若水

煙波少人

霞立ち注連繩軒のあらしに引渡しを門

松北緑伊勢海老の紅 春の道具立揃り也

つは 初雛の音成本の頭成 天の岩戸の

暮引上りて 夜はほろりとと明けぬ 百

人一首どくろくも 文日の曙がひ

りともものひあくと老 貞流ぬしの獨歩

みろくは 鏡錦七鏡よりて しのがひ

春成めでうりり 顔におりる雲立ちし

春の朝日ふとん寝あて 緑扇本人心地

しは 日頃はいたたげあしを温湯ふらば

いせの自他 今朝もよく起 きぬかのま

頭中ら女中 畢鐘歌成走る 浮成と気も若

なきの若水小 皺のけすハ 才 有き華成

年寄北冷水より我 新に祝けしは湯と

て何うにぞきとソウ人あはば 三年よ

リと新湯は毒だくとソウ人のと

双六七初縁 小葉少人

今も日幸格の権り 却りて

の道半ハ 今の一至也十年 三也四也

驛路の流ふりて 今も世流り

顔よ目りかぬ實七七轉ハ 延ふ 一六腰

自ら推ぬれんを 今も推結りふあせり

急くきり 古路の書通り 今も名物と云

けぐり 百金我懐り 今行手七長腰 今

並本北風声不揚灯七七と 魂成消す 大

井七川笛めは朝日日記ふ 高水とてい少

石部七痛り今本枝七夢成 蛭一を結ふ 意

皇の驛めけり今も 今も喜也七村堺 今

流七夕雨ふ今相とて 今も先登七岐道

送七霧ふ眼めくら 今も名利七峰 今

送了盲人七一夜 接枝七栄成 今も 今

子雲助が不義の縁め 今も今も 今

心七七 初縁七 仕俊 今も 今

心七七 初縁七 仕俊 今も 今

心七七 初縁七 仕俊 今も 今

27
二頁

路は開くくも 草鞋ふんやいたき

皇世の道半そ 今も昔も瓦葺餅一袋

賭物取争ふて づらふ多き詠也思きた

くは及けず けらけら大博く降る

と 葉多の握ますしを振出 一戻り

るのそ

[Redacted]

[Redacted] 以養より 術談巻読の構設

く 運年が社著を 批評成りき事あり

り 葉多の構の主筆なり

明治二十年二月廿拾日 溥少人真如の

月、少説を掲ぐ 子か我書多紙多也也作

る 自分と翠意漫筆として 短編小説の

たれ 美妙な芝居を 茶鋪より伝来さ

引札と 小葉の十回物語の文と

引札としは美妙の處を作らうんか

茶所開業の考案

子か産は 新茶場を午のつじ 申り

戌亥子丑寅 宇治上真の茶物改化

子猶とまた 目成四より 葉を撰り

骨

改折りを細枝に捨て
 してはるが亦るを康
 僧のもて 響きまぬうすのこもうは 今
 日夕暮の福業ありて命付ワセたまひんは
 は 翠月の朝の時刻にたうす 必ず
 送るまううづ 将又今日の朝程も命付
 ワセたまひんは 暮昏まううは進うす
 る批意取れりて 半日園とまを吟うは
 是成記書とみまうり 玉露の恵いしと
 濃茶 薄茶をうりぬ お情けとて 忠告の
 昔の自身は好茶とまうりて 授茶の初もさ

うは空翻も程お 影のまうりて主人と代
 りて 湯がま 一口幅廣く言ゆるの 叩
 うも急須は 只叩くは 手しうまうす
 たうは言けり 美女商人誌

芝 半日園

またその号ふ 紅葉が南山より北里稻
 本橋北名妓 白露女死我情むれ又何う 掲げ
 て子が古時戯ふ 戯す

一筆田回文

明治廿歳の更衣月 北里稻本橋の白露太

夫 爾王^二請^ハカ^マル^ニ劇^ハ山^ハ別^ハ莊^ニ止
く 南山子^ニ妻^見教^ハ子^ととも^小之^成大門
ふ見送^フ之^告ワ^乙曰^く 一^ル去^ハい^卦お^い
う^レ 此^處去^ク之^何處^へ行^ク 去^ル
り^人間^の極^淨土 生^ル多^少の^下歌^舞代
菩薩^と崇^め之^ル 河^東一^中の^妙音^小天^樂
の^終ま^りの^間き 大^盡佳^音此^一住^小金
色^ハ物^化以^降ら^レ 表^ハは^一切^ハ野^意成
成^佛せ^しめ^ス 聖^ノ之^處子^夜九^重之^階ふ
を 湯^仰隨^表也^善男^子子^小處^{いた}る^る 雲^雲

維^摩子^也三^ッ布^固 一^カゆ^セ行^く
其^視成^とら^へん^も 腰^ノ下^ハ寂^滅為^身
身 忘^業持^仲也^攝主^大奉^大悲^ハ此^声成^奉け
於^子と^らけ^たる^理成^中字^ノ也^也今
さら^何と^千都^ハ鏡^鏡と^甲雙^河之^也也
水^即ち^野意^の口^ノト^意氣^息ま^て曰^く 現
世^ハ川^行也^流小^深む^と 未^來は^必す^りき
ア^カレ

蕉^ハ葉^のろ^て糸^ヲ舞^うん^心之^也
少^さ白^露は^玉と^幸り^り

二下
六

福う産むら竹の中村福助丈 俳名小
 よふ梅の苔の若きより 玉蕨花瓶
 子董り成傳へ 仙骨花手振小自多也
 妙成そふ小 清竹を柳さくらりのり
 中ふ都を春の錦絵は たびふの花の
 やさしめ 洛陽の残霞おや牛家の心
 と共狂はしらす 今々舞台切まり
 名代へ上り 又、後世思ふ一景
 勢揃う一

明治丁亥六月吉日

拾先号は明治二十一年七月北出版小一
 皇土新聞報の一揮成置き 伊波信光北記成
 揚く 當時は皇子結まじ他北記書弄務成登録
 する積りありしなり 月の香園入社中 出の
 其年紅葉松尾結芽一代つを梅菴中村福助初め
 て名代に累りたるお祝せし又何し 少は松尾
 う 唐神く墨梅成描 紅葉 瑤
 せーとのりえ 今と 子記花するより
 人 又子曰乞

中村梅菴上名代記

代劇雅堂

紅葉山人

明治二十年十月桑笈の拾遺号に 煙世山人初

めて眉山と改名し 思ふが信即行成道の一

文を穿す 此時より以後文庫中の戯文は

つとより小眉山が一手専らとすうと 手癖

吟物と多し 九

拾遺号は今年十二月の出版なり 九 美妙出の

号一巻の落落の気味 短篇物に指す 是より

以前の美妙外なるは 談話語と文章の一致 語 我

田文より借用して 見人との意見成時に自分

等々相談せしむるなり 九 働詞の变化語尾の

描手法 多くは擬人法其他外なる文を移す ハ

クキエエし日 九 何れか 九 功に借用 九

一ニ試みたるも 何れ語尾の描手法不気分

く 九 且つは剣造者自身も書馴れ自馴れ

ぶ 九 面白うた 九 目上 面白く 九

獨語の様 九 面白く 九 目上 面白く 九

一 九 面白く 九 目上 面白く 九

一 九 面白く 九 目上 面白く 九

女は、
[redacted] 元語多くして [redacted] 甘んぶる [redacted]

[redacted] 新友が訂正考案したる結

果僅の昔来の地の文と言語とを七分三分二つ

まき也 其の致多し「」に「」にまき也か味

しを僅に成初し得たるものか其の花の落の一

言多しを 亦は言成言文一致師と稱せり、乞

の言葉 [redacted] 文師を以て 忽ち世人の注

意を成位り [redacted] 殊は子ガ [redacted] 奇才哉得極

る振廻中へ [redacted] 其名は [redacted] 一時

● 隆是しを、子成しを文壇上 [redacted] 將進成得

せしめあり

その四五集自らは専ら力成教師詩を用ひ 是

つとは言成言文一致師と稱せり、乞

如く 逸れし創造のものに向つて筆致つけ

と 苦心さきり狂せるに如きもの

あり也 其時の作りに今より言成言文一致

● 幼稚の言成言文一致師と稱せり、乞

と 此時代の言成言文一致師と稱せり、乞

し、 [redacted] 此時代の言成言文一致師と稱せり、乞

[redacted] 此時代の言成言文一致師と稱せり、乞

[redacted] 此時代の言成言文一致師と稱せり、乞

也

本号新入社員小立花屋董(渡邊輝之助) 琳溪

居士(長多川金吉) 香榎梅緑(松野貞三) 可

り、

明治三十四年二月の十六日号小 眉山始りて理

贈秘書林とソト少説成場を **黒**子可趣女

作也、**黒**集年眉山が思葉の世の一文行る。 是れ

思葉のさる鼻屋流ちりて 僕仕坊主と有る

キ一たうらねと 社中誰彼此別ちを推し出

たりたり眉山が思叶きたるもの **黒**

ツ
ハ
ク
コ
ル

浄心坊は置俗を勸むる文

名界鐵鬼 眉山人

飯臺の思葉外史 浮世の世の仕書一

いむ 本のけいとよある 浮世の仲間

入しを 無垢庵浄心と名乗る水は水ぶ

はえもなき筆小腹ふり少ぬ業成るん

しけん

恥の森の下露 思ひうちよは水ぶ赤

うむ白の色け即ち思葉外史 何ド未物好

の著提心ぬ業しを 水晶丸珠致強勝気小

以下
四五
つ
つ
つ

臥がり 仇は流世の行は澄ききり
ア、下愛さるふ思体きさる哉 眉山人偏
祖右肩左膝の地につけて 今草莽教して
曰く 昨日削つたる今道心 遠く紅塵我
望んで名即是空と思ひさる
青二才の身とて 法の心は紫の鳴田の
根掛れぬ朱の葉の 朝に挿ふ谷川の水小
流流れぬ醒さる 日高川の
流るる 一念の蛇とるつて君我取捨さる
とす者 流の意の妙の地のうづり
ふ

人ぼく忍らるる事小はらすん 君は忍ん
て年よりけし盡すか如きあうす 帝成
種めし藤房が對するも河より 川置の妻
と持たされむ 蘇忍姫が胎我と懐けし
素より若後家此佛集我あてとす者あら
んが 説く若衆は揃りて松つてきんさ
心は何れ申渡さるる 削りてあたる 芥
子七粒と云もなきたすまい 唱はる指
の唐は外面の菩薩の下髪七垂し挿はる
善賢七衆は心か教義の聖賢に撃つる。

夜目は素ら色どあきは男女の煩惱の猫の
恋ぬ見まじ 志めの月も既夜よりくとの
をちき春の眺めぬ ソのち水ど振捨て申
く雁金三味 さし之行く越路の雪の肌小
理ぬ鏡うしと を法師の字名ぬまふ人よ
りは ととれ都長也兼河たり 志白尔嘆
けく夕白也花ぬちがゆて 目玉けふ一も
支る懐氏とつけられたまふく
是の對を思葉が春文らう

恥づく毒の丁露奥ひまふりたふまふ

眉少人々答ふ事

ア、嬉し七森の下露 思けし不裾ぬ湯を
む 月そちの せの活り 野草も美別ち
ちどち情ぬ知うと 思坊未とせふ
けりし日はを悔の一滴味けちう子けり
前ぬ擁する幾千に羅姫 後ぬめがら何
百の艶奴 振拂つて 蹠を將きふ 上座に伎
宅ぬ脱して 羽院に峰土へ靴替せんとけ
鳩ぬぬつ格子走 血子泣く長廊下 鳴
啼きた情けちいけ 志う子 暗く美人の

高士類は河の流と霞き一眉少人
墨悻の裾は捉へて流を縛りて目く
一頭成すり小坊主 削河のまが青二才
う霧のせしとてソソを佛事成湯人
い少小浄々寺の標佛と持まゆくすまは
信せう踏止まりて言は衆生は舟渡せよと
テモ情は深い哉 紅花を根未か全く
乾うす 紫の爪の屈しまを全く福あり
煩悩は霧成絶らんす 二世は縁成絶らん
いと難く 執着は祥成断らんす 老妓

の謎成とくすりと類りむ 名毎の連律
溺ルはちえ濡れとせめ 集みは自外と連
少年のうるとちりせぬ 天は無情なるべ
よを慈愍道也一巻成摺りて 彦と而して
之成縹々小巻成掩りて 雲の朝小無
情と唄ちし自鏡と 袖園精舎の鏡よふ色
ソ右つうる諸行無常は燈らるの如 花
の夕小燐燐と輝きし禍福と沙羅双樹も久
く ちんを毒者必害の理成悟うがう
思信幸小生は異うナルと 心も朝自の

災厄莫九悔る一うせむが 今よりて悟ら
すは何時よか期一何所か待て 愚劣不
信と一業とるがて思業より水牛の様岸の
乾法所よ夢のあふ成浮ぶし 況んや煩惱
の狂犬よえ福及唾きル 未練の暗恨より雨
奪破く水一清立の轆糸より水踏まらんや
證誦觀經小身の委ぬ一後日 今春の乾猫
成見くちと弓水よ於ソと喜情の白紙九猫
成見くよりりと軽く 水鼎九珠散取くあ
と我ら於て花魁が里蔭の履取取くも

重一 眞眼ぬ於つと涅槃の珠よ入らんか
とまかく 小勿解る一 道心漸つて石佛
とありしも 徒小を慾界の魔鬼とまつる永
く三鼻こさすうけんが 眉少人何すれを
連小無垢庵が笑の扇成叩きて 俱よ妙御
子悲はぢる 今より後者の花の董我菜心
園の夜の月成めであば 庶我々江眼珠
のこまうて 五解よりと走成放たむ 田
夢外史すぢよ 成佛一終んぬ矣 幸よその
菩提成昂ひけまらん

昔は艶事の存尊

今は紅院七侍牙

無垢庵浄心 謹識

の

此の如く初号より拾号まで、月々社を

加一各月の文章之上達厚稿も排替也思案當時の同辭は

はくはと社運のち、素大さる人との水

と勇に立ち折、難言せしとちを

合致せしとの、頷居んよ、思ひ切らる世

を、此位を以てまじらざる

印刷代紙代の必要を

収入は必ぶる必ぶる

■厚稿料 ■はま望もき限をうすい

つて並身事方のせいの作成、任りも世人が

銭本一も讀んで呉水に難有きとありと、

十の議きとまうそ、業臺するらるる

り、明治二十一年の録を、改め之基準備を取

う、

さてソ、業臺とち水、人のあ人と、

の如く社をばり、諸方の往復

やう製本の取扱業送る、とるも是迄の如業

16
の煙草早丸
坂守親作
在る菊水
の店の前

が三思の書斎を舟あどきもろくろに
きき編輯所が卯一の入用との議子、さうは
と、^{此の字}河合せたる結集、社田社作の翁屋
（主人の本姓は、あ川政彦部、後たに、道吉と号
して、花の雲、ホマド、ヌール、バンド、ロ
を、化粧、早種、或、愛）の周旋を、且、向、側
の煙草屋の二階、或、借、或、お、陸、纏、^{何日何}
日、名、自、机、一、脚、或、用、意、して、新、編、輯、所、へ、集、会、せ
る、の、思、状、或、思、せ、り。
物、の、よ、く、引、越、の、日、と、る、ゆ、に、何、の、き、を、待、ち

を待ちたる、社中一同、一刻も早く編輯室へ机
お、一、筆、揃、つ、て、見、人、と、思、い、悦、び、さ、ま、室、調、へ
た、る、机、立、脚、^{手、移、用}、^{手、文、庫、提、り、て、}
撞、牛、の、路、次、^{お、り、た、る、は、紅、葉、思、葉、連}
肩、山、音、替、換、麻、袋、自、命、も、今、せ、と、都、合、七、人
台、所、^{より、二、階、に、登、り、て、八、景、殿、の、り、と、間、}
壁、の、向、の、亭、の、向、つ、を、づ、う、と、机、並、へ、と、手、文
庫、盾、花、や、う、り、を、と、の、集、考、書、室、煙、草、盆、取、へ、と、
肩、怒、う、^え、た、る、岩、畔、天、晴、り、が、水、も、草、千、の、驢、橋
と、見、^く、朝、よ、う、暮、方、ま、で、暮、水、と、よ、う、夜、十

ちて病の ~~...~~ 安物の小 ~~...~~ はるかに

■ 掛を河の橋とが落ちきりぐら時計のふん

どが止まりきりぐら、それか船と一層々

■ あーつと雷様は落ちた様にお突声で、後々

お出りきりきりお出様も星気る取う水と、

二階、意気なやがれお居るさ、きり好まで、と

了もきりも何も出来た話のものはおどろきと

せん、きり、まは私に生半輪扇持て、町屋の

きり目きりは、しりも親義のな、きりよ、今朝

い、きりきりあのお脈、きり、つむりも破れ

了様を存しきり、宝舟、即初夜、ととんとき

、めが、おが、きり、様、お、きり、は、きり

朝おめをきり、え、げ、り、と、す、お、お、り、申、は

何は、お、り、ま、が、きり、お、きり、様、お、り

「あ、い、様、お、お、り、と、きり、と、平、物、持、の

や、り、と、きり、の、道、お、お、り、お、川、も、きり、の、きり、きり、

きり、お、は、と、と、きり、と、きり、お、お、り、お、お、り、

例の向、お、お、り、お、お、り、お、お、り、お、お、り、

は、何、お、お、り、お、お、り、お、お、り、お、お、り、

事敵とシてばうざげとする。ちうとがうと
どどばどねねする。後にはあちうりくぢがうの。あ
の華籠籠の華籠籠の破山のまをまをと生養気生養気を事成ゆか
あがう。えんふけち毎 **黒** 高上高上にんたう
うたうもろくと、ゆんをゆんをソキリソキリをたう
切つたやうなとの、あちう 比方の騒ぎのゆと直
りであううたは銀を事知事知の助をたう
おろく。后でうんたうもろく **黒** と捨せ
りふがけは玉拾えうまはうまは **黒** 善は善は露露に
いれれと手文輝序記ゆらいれ **黒** 才たも

飯田ののぶ景方子子宛の中のぶ景方子子宛の中と書成り
さうめちの牛扱牛扱を屋所屋所の書高書高ととても七人
の隣を考考うう **黒** ととてまらるまらる 信處信處の處
と様と様 **黒** 結集 九段中段と **黒** 活版業共益社
の向側子 一軒の立屋ありん。右 **黒** 隣は倉庫
左隣は塙塙と仕切 **黒** 是れ水出を屋
隣今際水元今際水元 **黒** 細新好やうとと利書へやうと 小言小言のふ
老爺と長才 **黒** 庭成持出心
近所とて、庭所庭所の中央に位して活版屋
と向ひ合向ひ合、是れうら屋強屋強を成はる成はると説

一法一之 所借人は五拾 即三品 所造人が尾崎 徳

入りの椅子戸子幅少く長さ尺五寸程の破 榎橋

卓子と椅子一二脚とを拾方より拾方にて 備えて

師範校婦人 新聞雑誌を 備えて 用せん

の堂子供人 手奥の台畳と台所は 備えて 用せん

しが之園 の障子 八切りたる儘撤去し 備えて 用せん

場を任す、之園より右半程椅子を置かれ 備えて 用せん

ハ三畳と六畳、此処に友死の存続 備えて 用せん

並揚りもさう 備えて 用せん

西鶴の工キス 備えて 用せん

のが片を材料 備えて 用せん

場 備えて 用せん

カニの 備えて 用せん

毛 備えて 用せん

靴 備えて 用せん

机 備えて 用せん

中 備えて 用せん

火 備えて 用せん

新 備えて 用せん

三子
一子

川柳狂句

小説類 (社説)

紅葉

紅葉 美妙

係日左の如く多分あり

其陪考帆谷田香縁の諸子

手塚編輯

多田澄山 (島野志木少人)

澤田龍蔵 池田水山

前記直目録の外一折
本流すは

とあり、
以外平常

は長多川 津波宿坊

社説総書の時も中々不眼一正居り也所

土曜

月の巻

金曜

眉山

本曜

九草

水曜

思葉

火曜

(連)

月曜

(紅葉)

打付た
本のめく場
うらた

順の
綴札子
鴨居工
無難作
針

稿の重層を。此年まづ目子付は社説古書

嫌はる貼りかて、控ともく、
画めは

の致之、壁には挿画の章版を稿の切替を要

らり炭取、
積重りたり、
古雑誌

三子
一子

三子
一子

水曜

火曜

月曜

土曜

金曜

本曜

水曜

火曜

月曜

土曜

金曜

本曜

アア 下江お二階く **黒**らるもあらうらう

さうの **黒**と 吾輩の 餘る **黒** 解振る たるふらふ

薄気出重くあらうたる 思葉多う 修成立つて 二

階の様平ちり 見下す下よりハ **黒** 見つけたる

黒 刹那 糸うは 思葉の 白く **黒** 三種干の

形う **黒** 翠花 かしう玉の中葉の 如く 思葉

はき丸亭の **黒** いのめ **黒** の 先生生る水

む 屋の 降りて 浴衣引 掛る 下りる **黒**

黒 拾得 下腹 **黒** 拾得 下腹 **黒** 拾得 下腹

後うて 毛の 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛

向うて、 此集よ ちうが **黒** ちうが **黒** ちうが

ひは 初め **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

か、 ちう様 **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

空欄 西階の 意う **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

水が **黒** 誰あつて 取捨 **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

往教の 意 **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

黒 **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

あう。 名所は 塵 **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

猫犬の 早原 **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

意 **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒** **黒**

乙類うも郎の髭ありきと風流がま 是所人あ
 子時珍書う向うを おまどはけと大勢様のお
 集まりうまうを 夜ふと睡らまを お眠らうを
 おどつまうの中島屋は所成まうのふと向く
 2. はい別段高野と申して唯座半七八人の道
 身仕事せ 大の字移成子書きま。たもの成難
 誌ふいぢん書くまうので 山小う一冊の成
 づくで **黒** と言はは土屋けじんま身しそへ
 いそルはく、 ぬー何しるわは繁昌を控攝
 ぶおどいぢんと、 昔の何しるわは繁昌と

乙類流行言葉の事、 大の節げんは「琳派
 可美美人の字移さ」「いよまの大将何ぞて
 もは繁昌を」まう、言うた様去其屋落ちとあ
 りたうまう、 昔の此状は前記ニテの外 尚
 今も思出 **黒** 今うては腹取 **黒** 記
 淡いうとまう、けりかもの、まうはと落る者
 2. 只繁子昔の美事とて記しるは、 紅
 葉里葉は句端初年の雨々、 一文一章の草す
 毎子甲乙向ひて、お澄し、 五二批評し浮術す
 うのうまう、 おまう、たう、うは朗読す

古くは流行する、後世も身みするに聞か

之に、神羅 ちやうりう、河 山、野 野、と とも

リ、神羅 野、野 野、と とも、野 野、と とも

リ、野 野、と とも、野 野、と とも

縛り、野 野、と とも、野 野、と とも

少く、野 野、と とも、野 野、と とも

一とき、野 野、と とも、野 野、と とも

振、野 野、と とも、野 野、と とも

面々、野 野、と とも、野 野、と とも

細、野 野、と とも、野 野、と とも

多、野 野、と とも、野 野、と とも

白、野 野、と とも、野 野、と とも

取、野 野、と とも、野 野、と とも

屋、野 野、と とも、野 野、と とも

名、野 野、と とも、野 野、と とも

月、野 野、と とも、野 野、と とも

十日、野 野、と とも、野 野、と とも

十、野 野、と とも、野 野、と とも

日、野 野、と とも、野 野、と とも

十、野 野、と とも、野 野、と とも

日、野 野、と とも、野 野、と とも

十、野 野、と とも、野 野、と とも

日、野 野、と とも、野 野、と とも

發行部印刷部は印刷法を印 編輯部は不格即
三印 善平の部門は印のかん 心紙筆耕千葉
葉紅也名後葉、 卷淡若説書家素象士同新報、
記事の種類も此も重うす 義 記子場付た、 四葉
の祝辞は存のかし。

巻頭の詞

鏡欄不克うの、 乃、 紙金の目貫は 空一
く煙草入川の金物ふ太平此腰の物成飾り
切腹復讐はた、 劇場小其成成残すのこ
明ららるる代の古国と羅海小

治ゆく聖世ふおろく鳳凰は 印刷局は
棟上鳴き 麒麟は警車に前と馳せ かつ
る目おまき古世小相生も松成謡ふて ヤ
アツア腹鼓成うつと 与暮一とんはりふ
島多一 何とだ一と治國北岸め君れ古馬
前と馳せ集一 先祖重代集筆はげ陸れ強
尺二 十三文一ト来きうくと といれ矢
牛子けがれども 陳筆は夜具同呂敷の時
節 録受とふく劍裁ふ代ふる不筆録成以
て、 文学た花と一き一合戦つるまら

号より旅行の雑誌とありぬ 誠教社と
 女子博覧会 評判とと夕幸北空 雷名
 妻と後つそ世間と似石山 美草集成 唱ふ社
 色 出親切と墨見して曰く 昔の名妓が
 張成学心 金錢つらて自由とありぬと休
 当世の多き心平之あり ちんは足下と
 と道へぬオオと 諸事とつが水と妻とた夫
 へと 一方何れぬ世話と恥り 有が下
 番茶もぬばお鬼も十七号あり まり老
 ぞぞへへ今板けと 一号も有り 活き

人の心と 五々 年以爲 狂ふ此羽撫成
 四方と飛けしと 今好む常古成り 事ぬ
 物りてしとらぬ冊子成編み 名成我某
 多む包水面白 世りもおつと つけりな
 し 人牛と掛くもしと 日れ毒自
 う筆成取く 字成古算の談とく、 絵
 以丹絲風と河どけなく 夫と人 菱散の種
 とありと 次号も待意ぬ 取集とまぬ恨と
 多む 心二つ身はりりり 少むとくも丸

標致よりハ既存者と 其妙也古堂願ふ
社幹もちより げり乗が来て 浅草よりぬ
澤草もがき 百段とつては 千尾寺に長
く 歩引三河うへ事成 社中一疏子代り
て

忍反社出入も若且那
思葉外史

ウー自惚つて曰す

キ九以とちり忍反社之則ぬ掲く 是れ社が創之
以米初より世間並に規則にきりのちり

たものうを 日と日と社名も増加し 控務

の規則はどちりて居るの 入社の子経はど

うすのの [redacted] 社の牛経氏同令せ来

るよと 秘蔵するを その一面倒りたまうあくふ

り [redacted] 秘蔵するを 一役づけ酒務のめ

しけものあり 此務おまよりけ 聖白眉山

思葉自名号成集の 翻註 其の規則書はどちり

其面目の同令せたる連中はさか繁き了がたう

りつてモノド北荒切りと人ちが下の

大六編 其社則の白く

但し按摩合席りて 護む様ふ控第は
 一 樹の烟一河の水とソなすべく矣
 二 在れ主喜子 古左祖被下一層の力改備
 した手はむとの第志の方々は 田家
 老若 首賤 或論 女は 社名 たる 事片
 勝手 子 歩 理 矣
 三 社名は 社費と 一 毎月 金拾 或 其 月
 の 日 まで 子 片 細 使 じ 然 矣
 四 入社した事は 止と たり ば 社費 子 片
 へて 往所 姓名 雅号 印 額 布 寄 送 ち 弟 山

祝友社之則

一 本社は 種く 奉朝 又 其の 葵堂 以 計 子の
 存 喜子 右 之 彦 一 ば 喜の 以 或 種と
 一 其 類 有る 言葉 と 有る 此と 類と 一、
 見 子 其の 同く もの 子 けを 言 せし
 狂 句 也 古 品 以 増 け 凡 天 地 也 申 さ ぶ
 リ 鬼神 以 涙 が きの せし する かの 不 風 雅 は
 不 致 と 也 せ ぬ 子 ば 極 ぎ 無 号 者 也 何
 が 成 事 子 め 男 女 の 中 成 と 和 う ぐ 事
 以 主 喜 と 致 矣

度 用紙は奉書より幅三寸長五寸

社名は文庫社宛毎小只及び多々一

部進呈可化 其他ソウシ 徳分ニホ

る所と有之云ハ只 詳ラセバ天機成

漏ラサの恐ル有之云ハ 委細ハ内入

令此ト知ル人ヲ知ルサネ

六 本社は小説の起筆、劇場の正卒、小

説の及譯ハ潤筆ハ一字ニ付千金ヅ、

申受矣 廣告の要文、船句、戯文の

採削批評等の古俗ヲモテ 可申矣

但一連自書の草葉、近稿、其他政事

向きの文書は命ニ替テハ内断リ申シ

矣

七 芝の著作家トシテ 甚著書改本社ト

寄セシムルナ 本社は街談巻読ニ其

批評成場ナ 尚森羅萬象ニ於テ相克

の薦告下付矣

八 全国の新書雑誌等ニ 本社成批評シ

其一葉キテ一部成本社ニ寄送セラ

、此等成賜ナシ 本社は引續キ迄矣

成進呈下致矣 詩曰く暇釣錮
 亦此亦の所請るは無片往矣
 九 亦亦く 數ささるき亦新開の摩は
 幸此く親後 今固は志令そく九箇二
 合せと 晒為し條之如件
 剛信三十一年五月 硯友社
 亦乃幸号小瀟昔葉文潤筆並做仕り 考所は
 亦の五段るをたきくは種ら子来く者も何る凡
 うくと信したりも 情はるる錢おし之れは
 ろ来く者一人もなく、 亦の瀟昔何の効能も亦

廣考葉文潤筆直做仕 (引去)
 一 一字より百字まで 金十五錢
 一 百字より二百字まで 金廿五錢
 一 二百字より三百字まで 金卅五錢
 一 三百字より四百字まで 金四十五錢
 一 四百字より五百字まで 金五十五錢
 一 五百字より千字まで 金七十五錢
 亦仕仕入向き子亦法矣 翻向きは精々念入
 此瀟筆下付矣

頁
中央

二 月 日

社友社廣者某支部

何事何事を酒後ありし時
あの廣者科定止の時

鳩あそ、そのでは言ひ

其儀は今は降り相撲より相手成控り倒しを引ひ

も引控のたしものか

廣者科よりして階の一人も信者者なく

一文の収入の多かりは大笑あり、且つ此

廣者某支の主任白ワツヒ、其の社別は勿論一

つと十者も、何事も彼等も

と、一すとして又句を驚かしてケルがうかた

と、ありありあり

幸号、な社友連名調り

川側 幸号側下若側

後号側右所側 牛止側地手側と一と、合計八

十五人の名成列記

又社友と一と左の先輩

の名成場なり

土子突面

遷庭算村

文字三味梅

51

南新二

俣川表望

和装子

然して社許は前のかく美妙画に筆少く思葉外
史画工と刺雅堂冠英大博雅等禁西金幻の三
名あり 紙船歌を六十 付録の直成海も

■重信の伊波信先社成揚り 社中さうの
緋成揚り 川上眉山が祝文左の如し

我書多文庫之冊古例暫のつらぬ
赤心々赤心々くがめん あさひく まり
おたるそれぐは 粹道の水の紫の

初元結の衣華づらり 我書多文庫之冊と

りふ 直くは嫌ひふ色若衆 当年積つて

十七年 惚れたるぢぢルまひくべい 凡

2柳の伊達模様 大振袖を志ぼり上げ

つらぬく露の玉禱 筆のひるまきおっ取

つそ 今日顔見せの初舞臺 らく文庫の

糸道く 掲幕きつておて見れぬ 赤本里

本青表紙 さそ蕙志紙と申せども ソグ

川も似た山半可通 魂膽てくだ復本立

言の葉はのり茂るまじ 祀も実もまき取

思 野暮ふ仕打の所笑止や まだうら

若い夕陰に 味酒を上げるとちがるともど
も、その某の生立は ギヤつと夕々暗の
う 神祕穢教言無常 色の産入情の諸
多けり うんを碎いて うき散らす 脈は自
慢の京羽二重 まづ文壇の全塵を 取ら
ん世の門出よ 邪愛を成す 双葉は
筆の命先ある限り るぎまて息を
まくりたて 大鵬萬里一とけなき 硯の
海成海を越し 紙屑をたぐきおむると
お、敬まらうと申す

親友文彦の助に代つて

江戸前の息子様

肩の人のぶ

まゝは号ふ掲載すゝ小説は 五月鯉一連山人

一風流京人形一紅葉山人 情詩人(美少年)

了んて千紫菜紅中子紅葉分

春草丸花言能 我学ひて 顔る 下牛北名何う

一日詠ひし折柳花氣活けたる 我思ふふた

めたる 枝松尾花も様も何う けをぶる 水成

紙お結つてうらまひ

5-3

三子

いけやろお目もつけても鳥屋め

く桃をば言けし落生たり

是は参文より有り音自らの書有り音の書有り音

赤い活字の桃をば見と一きりよりく笑ひ

居たりかあつと

退りくを半成一枚の水とよふ

りきりくをさうく

たる句うと見事な

酒船が下つんと

此悪戯は山陽傳

又陣新例後立取らるる

此一節自序の意

思議下不笑しき成りつげり

ふ多きとよ

障りおとおひたしりし

るも類多く

次号はその年

戯文新師詩

詩を問ふ

扱方るが

毎号一篇

毎号一篇

毎号一篇

毎号一篇

毎号一篇

一を侍意はとどかしく 忍意は人目の實
守子島のそら音成はあり 純意は園扇成
うさしと秋の月に向ふ 日高川子橋と衣
るは限意まう 天の河成七夕子橋はま
川ある意まう 産意まう意へたつ意
名高の意まう 呆意うえ 憐成の深成は向
水とゆ 毛水はおあ 衣川の水の流川と
情の道は年と絶くは 正月子の燈初めよ
一とうきたる若まう 双の意の法師は玉
の危をあいらうと夢め 五筆三位は意まう

は人は心のまかまうとまう 子水む
志望寺の上人ご河たし心も 淫好待の若
作りも 浮世のためしき事には 糠袋
の紐は子うんを 目えほんのりりせし場
そりためは 当世の師直も顔の相好成崩し
里澤のわ事子しヨール 大のふつとの
まさためうえ 今時の業智も目むしと之
以道とくし 一樹の蔭も雨宿りのそもく
くく 一河の流水も岨越の積す今小
急ないままの 程まう意とまうと 逢成

照らす燈はつき園の夜の香水の量りする
うたふ忍び 文之 水を濡らす 袖とは
上代の優長たる高きを 今はずづうと
番敷の花貼るはせはるゆり 小牝麻の
声小胸お直すは山更のらひる水ど 二ヤ
ノ此考ふ思ひぬ素すは部の高きう、 金
屋雑障の中は重くも言けす 柴部屋夢烟
のけーたるきまむいとーき並ふ分ちけあ
るきどー やせも毛何極の身にそ 空江空
體の傍らうて 紙子舟綴小通人のま路ぬ

見水ども さうとて情は通はずうたなき
くもろくは 我態ぬ限みろ風北条柳と
松山が迷憶も 今更の夢ははらゆれど 低
梅子誦するは 野草の口のト言過きうと
は あいよく言つた言葉あるうたや とも
く 忘とりふものつら作り初りて 物思
ひの種ぬせの跡らむ 八声の鳥自らあた
へて 明ららの籬柱とけ成つきはまき
辰より松葉うむぎの冒算 何れは止占
臺ぬ吟はむ夜まき または候のそぼあ

青 つも直の雪降る日 社とちく蓋と
ちくちの思ひりつせせふのちくちんも
しそれ忘るき里の晴成木やが 日は西よ
り昇りて白頭の鳥 張合のちき字二場ら
ん

老長仕年一と二十一年六月二十五日の發行小
しと 小波野は前と今一 以篇より書きた新書
の批評成初成 然一と此批評様子書成取も
り也 然書野書多くのうへ 社外の新書も
向つては且書野も多く 然も子が思ひ切つて

の冷天敷置 伊人の書るゆへ余の毒多程とて
其一例は挙りしと 此頃録筆将軍と名乗る
人 初めと一朋情の細君と書る新書成書せし
我の批評成初成とあり 田舎は録筆将軍
る。書名もと 左のゆき晴評成評とあり

朋情の細君七不出議 録筆将軍
身一西尊乳成差首人場いれ一奉
随ふ是は傳記詩集と少く肖像成挿み
一書結見あり書る其日本の也競へ著
者亦自身の肖像成掲げられ一は自惚

の程誠子不思議の一子矣

第二 求婚の薦告成りて、小説に應用せしむる事
是亦至極の不思議の事、獨一層の不思議
疑ふ事は何故此薦告成りて、尊親の裏面
了る由掲載不彼為成りて、尊親とか
け離れ之段尚ほ不思議の事有候

第三 内尊名大守臺之事

鞍馬將軍と申す内尊名序文の七ヶ所
本文の二十七ヶ所と、疑ふ多敷り付
取違ひも多分り、有之候、僅々僅々百八

十二頁の小説あり、もどろろい、活字の
小説中の総計にて三十四ヶ所、著者の
姓名成り挿入の由、際不思議と申して
之無理やは無之、此處、古今、獨、あり、可、存
之と乍譯奉存候

第四 明らさず、地、畫、否、難、誌、成、流、用、也

これ一層、何、の、辭、子、申、せ、ば、割、り、殊、子
百五十八頁の内、新、り、書、き、（、小、さ、を、指
字多し、一、を、ふ、の、處、は、い、う、つ、め、と、申、す
難誌の三ヶ所、似、齊、の、品、有、三、三、三、三、サ

かきつる其の我前証しと
つたふ へん ちあふんと
の 一 ちふと 割注澤山の身推反声 身厚之飛
人た花ぬほうせと 文博の白栢組と呼べん凡
事も無理あらぬ
本号は新入社名拾五名也披露有り
本四号は今年七月廿五日の発行 本号は思
案大が校退きて専ら一書又厚の編輯に専す
と号の編考有り 本は文庫叢書以来 展覧石
格う 号大子に在るしと 号生の儘又厚編

輯人兼行人の署名せ 此年ソウウ号生係
の頁の鰭の心 文子雜誌も世の兼考
うううの署名す ちと 号生とて穩考不
ううと 二人とる 署名す 止めたり 此
時漸く文子とて 世の方針と定たり 二人は
秘考の末思案子は断然了と決し 紅葉
割雅堂の二子は志面弘及社名退社云々の編
考出と 学校に對する申訳的の要案は
一 此
本号は今年八月十日の出版と 此号あり

之核也 去つて 才の文輝の爲め一自身持け

五丁成りて終焉の業とありしと改めせしむ

和めとて 結 して辰崎も石橋大寺成道

を 月 我々成りて献身的の事業と 結 して肩

山も亦合主義成りて大寺成道きたりし 想友

社創立以来 何事をも 懐力せし山田美

妙止 此 際より漸く自身事の知己たり 結

由 栗 志 とうつて 結 するは金銭成道長き 五 輝

とは縁切りの際とありたるの 結 するは 結

絶するも 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

り 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

も 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

う 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

言 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

か 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

中 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

乙 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

あ 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

あ 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる 結 たる

く此向の事情成すべし
美物は最初

リ所謂霸を教々
[redacted] 名成

[redacted] 於之何人
性急なり

リ或は擬うて
本邦成期す

直る進んて
芝草第一

うんと
[redacted] 五博の余慶成推

心 [redacted] 我しと
一教の創成

了 利成と
勸導と成

成接て清
成志儿た

[redacted] 子の方
時ふ事業

全志者
紅葉田某

は 美妙
うEの

芝の注
喜成引け

女 ちる
月刊雑誌

ううは
[redacted] 行爲

利成得んと
[redacted] 形跡

の控稿
は幾し

あつと
[redacted] 新

呼の誰
[redacted] 及

の者は
只僅
我書

戦思忠、美文の二重甲、さつもの、終と推定、（推定）
[Redacted] 是れその[Redacted] 又其の

大なる所、（吉本著名の詩、術者、は、感、の、海、克、吉、甫、也、照、り、て、其、字、此、死、過、す、も、）
[Redacted]

千葉年、（い、し）
[Redacted]

多とと、（今、里、）
[Redacted]

と、（臨、川、の、芝、）
[Redacted]

一、（電、）
[Redacted]

才、（才、）
[Redacted]

は、（は、）
[Redacted]

才、（才、）
[Redacted]

載、（載、）
[Redacted]

水、（水、）
[Redacted]

水、（水、）
[Redacted]

消、（消、）
[Redacted]

（推定）

（今、里、）

（臨、川、の、芝、）

（電、）

（才、）

（は、）

（才、）

（載、）

（水、）

（水、）

（消、）

ル

音の軍さるる 雲様様

和の物さるる 里雲也

あひびる目る 軍の乳

星と見さるる 忍冬

見さるる 兵づく 右様

あふ載つる 新曲

又の眼も 走りあり

あふ雲散つる 新曲

雲さるる 電走は

雲散つる 新曲

まゝの巻本 街談巻後 美妙の丘 作 皇本立

紅雲が評せし 一編あり 其 古 前段 止む

し 屋舟の由の 跡さるる ありし 丘 園さるる

まゝのうら ー もの ー ー 自分 折し ー ー ー ー ー

い 評せし ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

世一頁「馬あどあ」 獨語の巻 一「まア」

う ー たら ー ー ー ー ー ー ー ー ー

獨語 ぶの 乙女 ー ー ー ー ー ー ー ー

廻る 目 2 たら ー ー ー ー ー ー ー ー

たう よか ー ー ー ー ー ー ー ー ー

ホイ 矢 致

世二頁「馬あどあ」 ぐり の 條下 ー ー

ふ 條下 だの ー ー ー ー ー ー ー ー

い ぶ ぬ 手 ー ー ー ー ー ー ー ー

年 ぬ 急 ぐ ー ー ー ー ー ー ー ー

オフト ち ー ー ー ー ー ー ー ー

二
下
あ

残念どやあいういさかこ
だ(イバキの勝牛より丸)
世の頁の親子對面の筆下
つたアお水の顔あらうさ
ホトよとぼけた老爺さ
お一ツの別ル 悲しいといのと取はつて
あとは正解なくばりとり
人々類だもよく出来て
此の如く 眞面目な批評は
ううと見訊利はる美妙が
る悪意にううの業のうう
くたろしえ 年々
人々
いざの事い
介意
すきまのうら
美妙も具はる程雅量
さ
いねがうし
の十号小社の
多川の淋埃が 道美人さ
一十冊成
出既せ
ら
紅景はちり
妙き悪戯の悪行
十二頁上の處は
一頁の挿画
も言ふ
廉末極さ
と
言ふが
あ
本
の
幅
寸
で
え
も
う
十
一
念
大
の
総
の
張

二
下
あ

る悪意にううの業のうう
くたろしえ 年々
人々
いざの事い
介意
すきまのうら
美妙も具はる程雅量
さ
いねがうし
の十号小社の
多川の淋埃が 道美人さ
一十冊成
出既せ
ら
紅景はちり
妙き悪戯の悪行
十二頁上の處は
一頁の挿画
も言ふ
廉末極さ
と
言ふが
あ
本
の
幅
寸
で
え
も
う
十
一
念
大
の
総
の
張

つてはるふ 苟くも日本に説の改良を企
 てる礎を社をよしを ちんぶ物にへん
 まるはるふ 如何なる所を聞か
 絵は美人の衣裳を 言はるす麻呂子
 子供は福祿を著せを置らば親父の耻辱を
 おざるふ
 十六直の娘が震慄の解成席しを 足がち
 つとも前におるい 張子の違の子 中
 の首と胸震ひしとは滅怯る形容 女美
 人の形容するふ……形容するふ妻を然し

張子の違の子とは情あり 美人は美人なり
 しく形容し 下女は下女なり 形容せむ
 はるまゝいと考ふ 談人を張子に至ると
 きは人々絶倒しを 胸震し畏いおるい
 ちの時々の娘の心持はかゝるであらうとい
 おお徳の浮みまふし 何れも張子の違
 の子は素的の心入つた
 うるはやく 文庫やそは批評とソフは 三面
 目と新著北巧林 代論する
 之を捕へて思ふさまおもあやう

以上

お年うだり洒落のめす、とらふ風うと是の

文様の吟物のゆゑとあり、まほしの雅治も

上様評の筆をまうんたるものあり、
おき田葉

の印まう漁山の文結き、
おき田葉

岸の隆利をまうまを、
おき田葉

お最印より、
おき田葉

い、うと手酷く自着多本ま成かう、
おき田葉

とて、
おき田葉

まう双まう、
おき田葉

ハ、おき田葉は、おき田葉、
おき田葉

前口らとおる、
おき田葉

十競とまうを、
おき田葉

紅子戯話、
おき田葉

其今也、
おき田葉

言降の状、
おき田葉

今一、
おき田葉

も、
おき田葉

と、
おき田葉

自叙、
おき田葉

良侍は、
おき田葉

おき田葉、
おき田葉

おき田葉、
おき田葉

おき田葉、
おき田葉

おき田葉、
おき田葉

おき田葉、
おき田葉

おき田葉、
おき田葉

言たい事或胸に量む
夫たうとも 初言は思ひのうけづく
と得言はぬは 言はず少く尋ねるは
まう 言はずとも物も去る十日の夕祝
支社と集ふは編輯の面々は 飯田
三丁目の田舎外史 今上丁目の香夢抄
難所と丁目の月の舎まゝか 駿河
美妙音美妙 少石川の春草九華 久堅所
の連少人 春木町の眉少人 乙水成合せ
て惣務するつと八名 大関の雑話成墨

くろくくくくくくく 世に公にせしむる鳥
許の志を著すは其の年と題はれり 抑
岩顔言語は徳の符を乞 心の香枝を
む 曹呂利は悲憤慷慨の文句は 書き
とあり 曹老女房とほろをいけてるを
腰母北村は走らざり 呂不葬は堀の
人間は音價とぬくも 権八鎧柄成叩いて
小紫がくくもきぬ美や人の心の赤祥を
まじり 今上の戯話を見えり 疑
とあり しが社会は字のうけり 幸八揚二郎

と今よりおさむ 品位よりおさむる名産則
ち下らば 之結より須磨の景色あり 粒
羽龍の角よりき声けりあり 今更の
仇史の膽の浦よりと 今更今更にけり
左金編玉付より作者のついで思のむち口中
へふ 六陽の成馬一貫目下何割の程しか
子と知るに 古も良侍もあむる 慶 君
子のつゝ 古も邊よりつゝ 已に収教院況
人々きた社々の年 証証自ら悦ぶりのあ
れど 喜言徳行の君子其人よりとつゝ

それ等よりお晴の 一張羅の 蹴上の泥より
よぶより 事 題より思書たりと 似たり
此連盛ハいれり たりと在季向と建
たりと在必ず西河岸の通るなりと 今更
一同の諷めり 弘葉子と平記ぶりの作
り笑ひてを曰く 相方より此笑たりと 膝は
曾てお傳のふりて 目見たりか 柳は微る
其膳玉より人の牌の題中よりと 似り
しもこの戯話のなめし 各品をけりると
きりは 弘葉子は大事なり 七人の名は

実を言ふ其言は虚はみくも虚あり また更
るを言ふく言ふも 此輩子も移りて毛頭
よりけりや 生臥常任の言行終へて言
ふ所の事と 寸分も相違はらざるに
我より初るも 能く事すまふかは
平生墨ぬ城に白ぬ成むが 甚く羅科の
行どるは 此れ多きふ 刺さる 四方深信は
淨観ぬ事多し 何の心何の事 根元一草
が言けやるぞ 釋迦も阿彌陀も照賢何れ
死すは 甚くふ世縁の亡者つがもね工

替首因轉と声高うのよ言致すは 満座の
諸子机成撃つを 一齊に喝つを曰く 君が
心備後表よりして 我の心澤庵存よりして
は 亦すふく 打連ぬと 打つと急
を歸る行く

明治戊子桂鐘

親友社北野太郎

紅葉山人識

(拾葉 巻の二)

程も何れや女は階子 うち言轉るる入事

は成美社の子入息子美妙商 柳原仕三の
背種の縫目高き成一着あり 前下子頂
ソリス米利望信子の藤色をとり取りそ一
禮

美 諸君矢教 早く集る筈なり 所が菊屋
一南味保町の菓舗 主人は愛重道子と
ソリス雲風女男あり へ呼ばき心たも
んそりめりワイニニニ

思 以良都廿愛禮の合懐ち佳節の花の
雲へ因家を喜るおしりい下)の所用がす

か二

美 (フニニニと笑ふ具は美妙の雪雲笑ひ
きり

九 時子美妙子都の花びりうり蔵入が
何りきりたり 二号は又牡丹女史
と在席まがは舞官具か子叶つたと子
あしだ

思 一の牡丹女史とらうを喜るが舞
程違ふさうだ 存くと言つても
色あす

九一社も一ニ枚面のソ、處々配削した
らどくだ

美一文章ばかり見せろりどすの下の面のい

、9は録不夜行のす

思二おのト著者の写る成巻頭へお一乃ト

よから

香一誌壺ドや書庫のよりちぐんぬお一丸

ドやあろ

九一香夢子知也か

香一知也かあろの儘の地面へ挿んで、難

波瀾女とソハ歌詠の片合嬢を 大の組の

意

美一フ……九萃子は人が好い……香榎

子は僕の地面をんがとソつを人の長屋

二託任兵の身で良

九一エ、此奴ニと香榎梅の林中で喚けす

香一アイテ……かと言ふと妖怪め虚実成

正々良のろをさるのト難有いまが西把

の猪八戒とソハ格だハ……

九一美妙子今千日ソト思ひか一乃んぞす

が都の初の一巻の君の挿繪……花車の子
……河の成より舟と見立られた
評判記がは
りこぶら

美つへーきんと……

九つナミヨールの讀本

一同ハ……フ……

思へる水のト志まいり付をるを我の種考

ネ河のバセク様

美つフ……此時種サラツとらつて見た

くもなき初成半面粧キルえ誦を 忍友

村のボツクヤン春本町の急業其扇少人

眉の今暖は……ヤア古群はくユザル

は目本度ヤツ

九つ黒山泊大分賑うまろを

美つ黒山^新李達其處よりつ……

九つどろおげ……史家村の九紋竜勇

肌ふもんヤ

思つ走……人の胡^{あぐら}居成うつてそのは和殿の

白糸だ

香琴梅は首成延しを上りは成すめー

昔のオヤツ あきよしの監獄より 邊小橋まう

てふは 那屋の人だ... 肩山

肩のあかしの 晴るは 錦鏡の番だらう

香の工、きたねエ... たりよのり水も今

行方人

肩のえん美 ふだらうく岸打つ 漣ス...

幸の慶よ及ぶは 震るも今は 誰ぞ一サア

ズアト 玉駕我廻る一たりと と言まがト

肩山は 漣代手我引て 主敵く 達ひぬ 只

見し 肩山は ちえがん 色の市川 袖肩白の

片羽織ピララヤラと 着懐一少人 微塵獨

鈴の博多帯 白糸の 鎖連 逆たり 漣山

人は スエツケの デイコート モーニ

グの古びた 我ソよ 纏ぶ おまは 却一

立ちと 見くも 悪く 懐我気 一を 往ら

思つ 漣子 何我人 ちよ 正我気 一す 一だ

... 脚気

漣は 南無三見り 水丘と 思ひる がつグフ

ト 落つき

漣は 何たりぬも かつか

肩の道理でさうきつと中ではさ臭つと思
つた

美の股があつた(一)

舞一お水けーたり美ゆ子何等の遺恨は

そ舞ともいふきかめ女高野比の

た僕はソ 僕は構ひませしーの

お日舞は錦子さへが不事知ご への

清の少女が涙をあげたらしもしも以

悪くは聞ソた(一) 言又一致の

左士打文学の決闘

眉のこりや面白くさうさ本たワイ

美ゆの髪煙のさつつけー口吸つる唇は

いのを斜下のち煙を吹か

美ナルホド脈とさうたは産々悪うた

でん...バ...この悪口は破裂さ

道火けをもく何でーが... 果る

む固何うでん 遺図?...イ・工在

九言ウく口調がききた おうそ



美阿は「きり」二乗地をきり

（兵國とまゐる）兵の仕「甲七少豆」といふ一言

を以て「思考の産物」を「兵の兵國」とありま

「これか」「思考の産物」を「雲」といふは「白い

雲毛」をきりと「いふ考」を「思ひ」に「苗色」

「或は思ひ」を「コレ」を「思ひ」に「きり」を

「眉山が「甲七少豆」といふ「きり」を「思ひ」を

「思考の産物」といふ「思考」が「思ひ」に

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

の「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

代取の難題の「きり」美阿の「思ひ」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

の「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

「思ひ」を「思考」を「思ひ」に「思考」を「思ひ」

而山也又此水垂堂^う_一一^まん^こ本
程言又^一致の妙用は其^まま^うか

思つ石在^話下却^鏡と^一を^連子^どう^一たの
た^美妙^の方^ちあ^切込^人を^本た^ちあ^ふ
ワ^ウ

局^のオ^ツト^待う^た 美^妙の^お手^は不^付
が^ある^一

美^の子^ねい^とソ^のは^何の^事ぞ^ん

君^の博^雅の^君も^があ^らい^やい^やい^得ぬ^ハ
テ^一不^信とは^我者^及至^難信^とソ^の

我^が指^つた^のス^一

美^のつ^つ一^一僕^とソ^のあ^ら水^とあ^らソ^のふ
ね^いま^ら君^の善^ぞん

九^のハ^一一^一大^玄園^をお^どす^ルた^ま

局^のハ^一一^一高^傑の^駢語^は通^る耳^は
噴^はく^も聞^くま^い 東^雲の^也雲^が直^也

健^の美^妙子^コの^サ目^也。連^結一^一

思^のコ^モウ^連子^話次^分題^と一^を法^則を^マの
と^られ^ず一^美探^人が^つう^い

連二ワ、マソウふ... 申す満足

一ちと幸れちや達の田がすむ

而つてきまの旅行ちきよの面ぶゆい

香つてサク 一申す満足

りあふ粉子と倉はせむら

連一エ、まがく申す

肩つてくち様をおぎい

美ゆはこおの生皮の巻一様

美つて二十或新巻の取

（是心新巻も望て新巻講しきまら）

連つてたぐく借成推原平三親

美つて又...

連つておまかそくは太い

叩くもこの踏るの下に聞か、大

又の種もす 甜丸何

又別人の事

のにおがり

メのタカノコモ 一タカノコモ 三キ

ン十カデケアカエテ ゴユケキ

ヤカククサカマカノラシ

ンナシニルシワシニ

肩少は二階のト大音なり

ハ……二十字まがは十五錢でぶきい

襦のゆき

白子細き手ぬがて 敲くも力を

竹の雜笛をまきく 女部花

冷ぬ踊するは 誰まや河つし 濁る声哉

振まき……エへ……オホ……く

ゆるぬらぬ 蚊咬良す 涼世の 斬るあき風

はつらまき人の 心うとオホと 怒おちつ

、呼うけをオホと 喃我所天南ため オホ

…… 津西ぬらる声いす

……無用、午のまがらてるま 襦引鳴か

て 紅葉山人 結む月の空田

紅オホと 歩みゆがく 右足は心おく 露玉ふ

すまきふ 涙成陰す 袖中

居の部よりち 離るが顔の 黒きは 袖中

スツポリ冠りし 如きまき

連つ 女青の 蔭よひうらてるの 月のか

九の十一 其の 黒い 袴か 芝るものか

肩の鳥羽王とソノの世思^しがする^らつた^ら
思^いハサア大妻^い……^い破友社^いハ陽射^いのお^いが
べ……^い勇謀^いがお^い揚^いソ^いハ本^い降^いた^ら
此^い者^い人^い成^いソ^い水^いハ三^い陽^い射^い……^い人^い事^いが^いり^り
マ^いヤ^いの^い……^い日^いの^い家^いハ思^い重^い成^い思^いえ
月^いハ今^い夜^いハ……^い身^い修^いハま^いつ^いい^いお^い足^い限^いり^り
サ^いハは^い妙^いお^い心^い意^い氣^いが^い集^い込^いま^いす^いか^い
思^いハ久^いハ一^いを^い軟^い弱^いハ指^いハ……^い中^い人^いハ……^い凡^い中^い様^い
嘆^い……^い
月^いハ……^いさ^いぎ^い……^い湖^い成^い……^いサ^い……^いヤ^い向^い

ふの隔^いを^い書^い見^い改^い……^い居^いる^い身^いは^い何^い處^い……^い
美^いハ其^い身^いハ片^い並^い妙^い也^い……^い
月^いハハ一^い是^いハ文^い学^い居^いの^い新^い駒^い……^い
紅^いハ文^い皇^い庄^いの^い午^いン^いコ^い口^いと^い聞^い了^い……^い
九^いハ紅^い葉^いめ^い又^い々^い々^い改^いは^いけ^い……^い悪^いハ解^い……^い
紅^いハオ^いキ^いア^いガ^いレ^い……^い僕^いの^い亦^いが^い先^いキ^いだ^いハ……^い
皆^いハハ……^いア^いハ……^い紅^い葉^いハ薩^い摩^いの^い書^い生^い
紅^いハ今^い日^いハ……^い悪^い日^いハ妖^い怪^いが^い残^いら^いず^い詰^い
……^いけ^いが^い妖^い怪^いの^い折^い詰^いと^い言^いの^いん^いら^い……^い

日(一) 草花のあまのなだがおもしそ水の松日臺
の新葉うえ

紅(二) 農夫のあまのなだがおもしそ水の松日臺
の

葉(三)

月(四) お幅あまのなだがおもしそ水の松日臺

紅(五) 草花のあまのなだがおもしそ水の松日臺

すいそあまのなだがおもしそ水の松日臺

ちるあまのなだがおもしそ水の松日臺

いん

蓮(六) 草花のあまのなだがおもしそ水の松日臺

月(七) 草花のあまのなだがおもしそ水の松日臺

鼻(八) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

肩(九) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

紅(十) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

紅(十一) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

か(十二) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

あ(十三) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

月(十四) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

紅(十五) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

月(十六) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

月(十七) のあまのなだがおもしそ水の松日臺

代替つて言ふべきに面が悪くつても
いゝといふ落小まるゝのこ

紅毛のたもたもふ夫子郎も淀川の水

た 然し此頃巻の酒をすつて見ると

イヤ明夜の娘は本程感あるものだ 肉美

的の愛といふものは一般に接水も 心

美的の愛といふものは流行ごころだ

月づム お互さまあ有はとり小物だ

紅毛美的と言つて気立がワ かの博子ご

とかがい少釋とあるい 著作との事……

小説の愛後すう念がうらど気甚著者哉

慕ふとりぬサ サア毒が…… 庵人か

来ると元氣は盡さずやうなもの 喜憂

は糾る纏うぬ 足下も知らるし通し致

少むつともたのト僕が軽筆を揮ふ……

月ハエツ

紅毛あサ まあサ 揮ふ僕が揮ふその軽筆

のたのめ小筆多れデースね…… まあサ

まア 願望するまアサ聞かま…… と言ふ

あまんだのト 紅葉の著書には書中有カ

としと詳がばいと云つた……まあや……
 去つた。……人成者が何程見たら……
 誰も一命は替人……まあやもあや……
 間たま……一命は替人……い……
 一人と……まあや……
 形と成中……性……ま……あ……
 牛成……ま……あ……
 日……お……
 夢……大人……

うづ……ま……
 紅人情の無い者……
 九……ま……
 佳境子……
 不……
 暫……
 三……
 う……
 拾遺字は……
 拾遺字は……
 拾遺字は……

香夢抄録 作者自の「話」と題し之
一、ナルタア、スエツトの侍成譯載し、肩山は例の
仰文杖の賦を掲ぐ
亦十二号、今日二十七日の糞をすし之
一、移春檻、カ一「花成の蛇」の巻高を掲ぐ、その
移春檻ハスケツケ凡の経篇より成り集りて掲
載す、其を初篇ハ佛國雜法年々見ゆ、凡
了今地より經の厨佛臺等の柱柱よりその目録
一、きよのけり、掲ぐ、
一、此篇を巻の首に懸た尾とす、肩山ハ

續りて自宅(幸御春本所二月日)新其書等の
掲ぐ、面白くも不致とす、

紅葉集の記

家布子書、ゆか酒屋豆蔵尼子足の豆
踏かす、くもあう、尼亦布子近う、ゆか
讀童歌書又の産自、入う、尼亦赤の娘が
琴の調は垣の此等の松尾、通ハ西涼の
聲が笛の節は尾よの康の産、り、り、
お出、小波世の逃道取、幅年の種成
しつら、ゆを自ら紅葉集と名づ、る、四巻は

たゞは陽げも夜書も左大の初夜敷
ら一三往僅小早成掃人かも朝夕上并第
の影成是世は前庭上小成其わしを双か
君の初夜枯人後園ふ地成深ゆしを土柳
の月也高千生敷ははしを鷹下下ゆと生
お園の土つふは並ぶて苦し下は足
外冊子竹成掃しを子敵か思はくは葉成
離下上菊成裁て淵明か心意気成葉ふ軒
は鳥子破り水を不破の空屋の昔成かひ
垣あ犬子懐さゆて葉年朝臣の後成思ふ

か、さうちりも坪の釜の松風四時不堪
すしを硯の梅の墨の振し不満と漸の夏
りもまゝくあ、小半日の閑居は並ぶは肩
少人其人あり緑をうぬ前髪をがし顔顔
よとく心き難たふふ心は葉の花の色よ
まふ洋い霞成情と露とあか志む風情伊
はゆし松人俳士の情成宿せとも言は凡
雅の撞道成延らそ味濃葱は口先の味成
知りのもよと上里身い西歌の物成か
て鳥の羽の筆深きものソでや此憶成是

て羽毛にこそ奉るの目とたゞても流世の
羈絆は魂魄と共よ去らずは水の心はか
りは道世の途我手しそ形は流世の夢結
女手杖のえより集ふ森羅万象あか
心自のたまふ折とありをらく 此草の
静法するまきのし夕暮の鐘と春の花は
気づふ暖の雲よ秋の月は悟むあはれ
宇治山の陰に故と思ひ懐世の嘆^さ戦^か野の
ほろりと思ふはしとく 老うとては
あふふの音野の奥よすむうきと言ひ

し人の心ちを同えぬさうさうがど世に傳
ふ陰者の旅は成ほましくはけりさ
ゆふ雨の夜も月夜を待たせればあを春
の行衛志や女軍とたへしとく原も八咫
成つてゆふを汝村がそしとて過人も何
ぞ有信りの情食成身んを桶りとう鍋二
つの石自由成難はしとく流世の塵来るも
のよ拒まき中俗骨の音入るもの止防う可
濁るしまぬ蓬葉の階よあしとく行かぬ
と名成と香成も知る人けりば^か葉のぬ

のりもろく

千種田原

その号 [redacted] 類 [redacted] 一 [redacted] 全 [redacted] 漢 [redacted] 法 [redacted] 等 [redacted]

紅子戯話中 [redacted] 如く [redacted] 一 [redacted] 其 [redacted] 親 [redacted] 其 [redacted] 恐 [redacted] と

と [redacted] 野 [redacted] 鄙 [redacted] 小 [redacted] 一 [redacted] 紙 [redacted] 文 [redacted] 字 [redacted] の [redacted] 一 [redacted] 部 [redacted] 一 [redacted] 之 [redacted] 研 [redacted] 究 [redacted] す [redacted]

の [redacted] 優 [redacted] 位 [redacted] 者 [redacted] 一 [redacted] 之 [redacted] 研 [redacted] 究 [redacted] 者 [redacted] 一 [redacted] 國 [redacted] 一 [redacted] 以 [redacted] 以 [redacted] 之 [redacted] 権 [redacted]

と [redacted] 於 [redacted] 之 [redacted] 新 [redacted] 思 [redacted] 想 [redacted] 新 [redacted] 文 [redacted] 字 [redacted] の [redacted] 研 [redacted] 究 [redacted] 者 [redacted] と [redacted] 多 [redacted] 之 [redacted] 現 [redacted] 在 [redacted] 者 [redacted]

た [redacted] ち [redacted] も [redacted] の [redacted] 多 [redacted] 少 [redacted] 必 [redacted] ず [redacted] 四 [redacted] 竹 [redacted] の [redacted] 強 [redacted] 弱 [redacted] 一 [redacted] 其 [redacted] も [redacted] 傳 [redacted] 播 [redacted] の [redacted]

俗歌 [redacted] 早 [redacted] 草 [redacted] 之 [redacted] 新 [redacted] 採 [redacted] の [redacted] 考 [redacted] 之 [redacted] 於 [redacted] 者 [redacted] 其 [redacted] の [redacted] 情 [redacted] 緒 [redacted] 一 [redacted] 緒 [redacted] 緒 [redacted]

この種 [redacted] の [redacted] 文 [redacted] 庫 [redacted] 成 [redacted] と [redacted] 之 [redacted] 指 [redacted] 載 [redacted] する [redacted]

此 [redacted] 衣 [redacted] 冠 [redacted] 正 [redacted] 一 [redacted] 之 [redacted] 座 [redacted] 上 [redacted] 鹿 [redacted] 切 [redacted] 禪 [redacted] 天 [redacted] 子 [redacted] 古 [redacted] 如 [redacted] 鼓 [redacted] の [redacted]

調和 [redacted] 我 [redacted] 失 [redacted] する [redacted] 其 [redacted] 委 [redacted] け [redacted] 必 [redacted] ず [redacted] 断 [redacted]

之 [redacted] 云 [redacted] 或 [redacted] 新 [redacted] 愛 [redacted] せ [redacted] とも [redacted] 世 [redacted] 間 [redacted] の [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 此 [redacted]

申 [redacted] の [redacted] 者 [redacted] 也 [redacted] 今 [redacted] 更 [redacted] 同 [redacted] 政 [redacted] 令 [redacted] 人 [redacted] 情 [redacted] 雜 [redacted] 語 [redacted] の [redacted] 多 [redacted] 似 [redacted] する [redacted] 不 [redacted] 可 [redacted]

取 [redacted] 捨 [redacted] の [redacted] 同 [redacted] 義 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted]

一 [redacted] 種 [redacted] の [redacted] 詩 [redacted] 歌 [redacted] 成 [redacted] 其 [redacted] 且 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted]

類 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 捨 [redacted] つ [redacted] べ [redacted] 其 [redacted] も [redacted] の [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted]

五 [redacted] 張 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted] 一 [redacted] 也 [redacted]

多 [redacted] 勢 [redacted] 之 [redacted] 無 [redacted] 勢 [redacted] 無 [redacted] 理 [redacted] 下 [redacted] 之 [redacted] 推 [redacted] 是 [redacted] う [redacted] 必 [redacted] ず [redacted] 夫 [redacted] も [redacted] 考 [redacted] 代 [redacted]

6下

朱唇の紅くけりてゆく行雲とともには
 活惚れ程自業成是也 雨雷ののこり
 人目長忍心助の申すは 軒窓の
 意猶もいと思ふ死んで皮と有る
 心願ふ 春の花の戯る 切響も羽衣掌
 けり舞ふとく 秋の月と啼く杜鵑心と
 も小唄けり 小雀のふり小唄傳は傷め
 義太夫 間うさるる腫袋さけ一平さる
 は 手軽くしを更る味深し 物の本
 詩は志なきと河を思ふとらふらふ
 詩は志なきと河を思ふとらふらふ

文の多きと ちう右部と 一倍の
 大なる歌成 湯気成まじ
 けりすもある 後集
 まるちやつと置かつて ちうと
 屏風とさう掛綴せり 思ふは左の一
 政事しを奉るに 括息
 部と一紙送る文
 今此部と一と 今此部と一と
 益能無旅艱の常

初々一まゝ心憂々とひねつて
中々明くさすとのある
心よりナルむや深詞に流る易く
下筆の調とりが、まよふ君子の百入
うは 我は悲に 亦もじがなふ
の一欄に借支け改訂の力我書す
道のみ全書に冷みしも 石部金太夫等
の心やお推文字多く 一篇一徹の野郎
婚婦のまよひが我すと心得 文庫の格
下筆の 社名の類にか、けり、まの

日夜の思見よりぞつらさを
と一の君 自身一人が、なふ人様の
名付成傷つくと何うは 罪や深く科
す思ふし 自身もなうく骨無げさる
黄衣と 棟よりこ 託信長せん
て心憂うと、 己の命花夜堂の半
く、自身に運ぶ心、 野のまよひ
も此心と思ふ心は、まよひが、少
し用事も、心道は、まよひが、
心えまよひ、一人、何れの里へ

のまき水心 長くは山種の新移世に終り七
人とのまき水心 紅葉山山白く等一代書
歌成懐古書は老竹の年あり
亦十四号 明治二十二年一月の書
て 山種初少を 紅葉山白く 少説成揚く
る角子の小説と 雑話と 揚く 世の示
るは 本編成 以て 創始と せん
亦十五号は 今年一月二十号 出版 八年少
美妙初刷 国民の友と 揚けたり 少説 胡蝶の舞
二 舞美人の 傳成 抄中 其の画 口 ちくも 老竹

の 一問題と ちくも 理解面 ちくも
は 美成 抄中 不^{ちくも}なり 問題と ちくも 曲線
の 形 成 である と 山種 歌の 美妙 抄中 其の
と ちくも 紅葉山 我輩多成 少の 一文 成 揚
けて 大 二 三 成 調子 其の 歌 成 知の 傳成
此 成 揚く
国民の友 三十七号 付録 云々
胡蝶殿 紅葉山人
申う 少 成 名 成 世 人の 未 成 成 成 成 成

しきぬうやぬ万ふ美河殿の物語りも是
 考の驚く一美 経歴の痛也とての雪の
 肌 今日が明りごとと因ひ其い水は
 程玉民の友成りてを漸く存懐成達了
 本文より水は(里杉の根多し) 睡解の
 まし 腰ぬいけ濡れたをたふ物成半ば自
 子 纏ひを 四多しは一人一人も居ぬが
 う 猶ふふやうとふが身へ對するとを
 もつうけりき着ぬ草ひ()とてふる 曠
 水は 此見より多しは あり水も多し

立安 くの言葉はあり いたよの
 驚く水は けふ何なるの 高も多しぬ
 の女たち けふも言けし けふ知り付 金
 紺障のぬい素ぬいき やおと多きよ
 しつうせともぬいたるの口の身
 まどふのくはけしたるも 振舞せ 結あり
 い 見よ人 禮愛新すは 年中の 睡胡
 程とて 京臺のさかき 双傳く言 ち水
 自身一人 けふ 恥辱多ふ さつら 以政
 社 惣親 会席とるも 自身が 養ひ 現

あり徳富はは、片身故さるる翁より
く詰り水つる水親しき見及ひ美
斯く翁と兼重在、片身が赤解の安成不
り言ひけれど、早水もそは成はるる小
言ふ者には言はれど、却て美の神話とい
へり、送る味多言者多し、只言ふ可き
は、女藤の河さし、吾人自れ、腹ぬ、早名女
そ、刺入、懐う、は、田子、累の、子、之、は、だ
り、何、は、知、り、は、是、見、す、が、一、日、は、安
何事ぞ、幸う、ま、し、さ、の、程、出、え、う、と、す、

ひ、色、又、父、た、る、人、の、美、妙、處、が、言、業、我、用
ひ、結、け、は、我、儘、ふ、かく、様、ま、を、推、察、つ
、心、の、程、出、え、懐、ひ、色、本、文、子、一、た、が、ひ
て、松、の、根、小、腰、打、り、け、恥、う、い、れ、小、身
構、へ、た、う、ん、う、は、ま、き、し、き、心、の、心、入、れ
も、知、る、可、申、言、存、ま、は、日、昇、と、短、襟、の
波、と、現、の、声、と、雨、音、十、三、外、見、る、もの
ま、り、可、む、と、え、無、礼、ま、る、男、が、夕、深、す、
了、丸、解、と、ま、う、え、誹、り、持、り、名、も、ま、
言、ふ、は、其人、の、幸、の、心、の、け、が、も、知、り、え

よもぢくろとまき尋ふ言
壽永気質の人け知るまどりれど 後の
世におと事一俳優シヤウキの女飛トビまどは 寢食
も歸女の心おまゆゆ 人の見ゆも男
のおとを推戴オウタイする言は 舞台に頭カれか
るもきは初ゆを神カミも通るとす及び言
すもや人目まけりふとと 下司カけ
たも得ゆぬ様まき安しと 露ツキ何と
恥ハしよをまき何とたふは 日比の心
掛も思オモけれ美 きてをま男の見た目も

いとけも結ムスけつるまや
源曲侍とすはソふし雲クモらるる言は
すや 至前マすよ近く待るつき人ヒトも冊チヤウかせ
給タマふ自身ミナのかく様まき 舞マシゆゆの腰ウサうせ
たもふは 墨スミ竟キは涯ヘリか 恥ハ辱ハす言を 曲侍
の面目オモふか、り言コトけりや 小禮コレイ何とと
下シ不レ礼レ何ととある 下シけまらるる 女メぐに
か 出デき九重クワウのぬる かくまき 賤セ人ヒトが
づきやぬけづらと 玉タマ侍シヤウの 權ケン持チき
おけ いまふ汚ケガレ 奉ホウるふ 卒ソツ求モトめ

由政乱脈不
あまきあ
知くく
くすくど
人ろの申言けん
づる時々
胡蝶殿内身
は所の面目言え
主と二侍の君女
和め
奉り
平氏一門の法侍
小西海の底上
て見奉らせ
るもめ々
内身等が大侍と
仰き奉り
言盡る君は
京都の傘張の件
とぐ
うらむ内身と
其軒所く
ほつる
は君きん
がの父あり
子ろちえ
まげん
づ
出と人の申言
へは
其祖の恥
りへの
そまおけ
がり
むる
に言け
たぐ
悔こ

入うせ
たきり
のりは
さちを
元の場
れ
とせめ
まは
禰身
ろて
おけ
まひ
とつる
無理
とを
買え
は
まきり
ども
列中
とも
陰す
く
さ
と
ち
ろ
お
得
も
陰
さ
て
男
の
前
よ
いと
誇り
が
る
ま
は
た
の
津
せ
終
ひ
は
中
の
に
思
ふ
心
子
業
母
言
さ
ま
も
内
身
が
零
の
肌
故
こ
千
歳
の
下
よ
て
平
氏
に
執
ら
し
き
恥
辱
成
せ
し
刺
入
生
みの親
美妙
氏
を
申
も
さ
ら
養
ひ
親
満
徳
氏
ま
で
変
罷
よ
苦
し
め
さ
せ
る
ま
ひ
不

不乗る者とは甲一なる人か
ころんよりは中中にて 推挙の心は
うけせよまゝいしむしむしりき さま
いのみちる貞操ぞとらん 角成境めは今
更遺感よま さまとも誤て入水の折
底の蓬橋とたりけり 二行の君の片伴
ソはる水言はらん心む 芳名はま世不
信はうすもま さらすは真す成千累の遺
すまといふま さま 言ふや死ぬるま
時ふちる人は死ぬるま 生る何の初

あ言ひし 頼り奉りし奉は果敢とくも
隠れさせよま 儲老成契りし夫成
いりよ君の片はる水むとて 無残に
もりか午のひけ 言甲斐なき自取累の
ふし世もま さま 鼻しよふ世は送ら
せよま心しむ 皇目見ん存あに生れ貧
うせよま心しむ 醉に舞ふ心まき胡蝶
ま さま 有情の胡蝶は花
成接ぎ外の花も世は 却つるま
葉のおはるま 口惜きまを 言けりか

河本つとむ

隠士人き重の肩はた成りけり

まふとふとくもすまぬ捕尾

隠更太郎 紅葉

却程どの

あつ十五早小初りえ 紅葉が新著「名懺悔」二月

下旬出版 紅葉の誌告行り 赤の作は紅葉小取

りて最も 紅葉の しのこしえ 先読もいせ

かく美妙い己の文壇にまらえ 其赤大は檀子

し 目下 赤大 の真点とあり 檀子 後ふ

は赤年の通々 脈我撫り 脈我張つて扱人た

に うの更世作の捧けを 世作 狂火本小投

せん ちす 葉心相向きすく小難うらけ 此

一筆 幸ふ名成成うは 後未傳ふ 文壇の金瓶梅成

く煙滅しを 雨筆毒成厚す小多太の障子た

すくがらうら 稿成道了らうり 或日 句

ぬ改め 毒成毒うちと 毒圃まう毒知らは 友人

とくくも 毒の毒をけり 毒 毒うは 美妙うは

言文一致とくく 創 生心 の吟物何とを 檀子の

高下

文の功

は別物と云ふ

目録

諸君

俗

はむづきとのり

多

多

多

五解

雅俗折衷と云ふ

創解

は揚

ソ

行々の難易一倍多は

者一を在来の小説神史の文と比し目新

一を面白く読み得ると云ふ

美の言文一致と云ふ

のまゝ云ひ言ふ云ふ云ふ

ありまのす。 記号

十六日付今年二月十六日の出版に
親友社
の我事多文庫の厚生年 更に特筆十八日
き変動

十一廿

追いつく 即ち今更しつゝの文庫の出版権

神田書物町三番地吉岡書務所 (女子士吉岡哲)

太郎君) 引換 印刷は勿論登載も一

切委行するところあり 即ち

編輯と 編綴と 編綴と 編綴と 編綴と 編綴と 編綴と

固たる 増補の自筆 増補の自筆 増補の自筆 増補の自筆

て印刷物 印刷物の 印刷物の 印刷物の 印刷物の

部 印刷物の 印刷物の 印刷物の 印刷物の 印刷物の

左益社の 左益社の 左益社の 左益社の 左益社の

の 左益社の 左益社の 左益社の 左益社の

下ノ一
ガ

積ツくは
■ 或る解自とたり 且てはたきりぬとい

女時在老都はいつの海に隠したる ■ たる 殊

り少我身多々陸は皆本唯一の文学雜誌たり

二 金沢堂紙の紙の無堂以来 ■ 其時陸我

■ 心も、 ■ 持統天皇の御代に

有ゆを 一とく 亦漢よりきりて古言のては

高部之々成字精粹とて喜り 或る陸田の借書

は月掛とて ■ 喜舟あり 年とて ■ 是

り多山 以葉に ■ 二三年益所の為め書一とて凡

たり

うくと 我身多々陸は巨初の巻定たり 明治二

十二年原刊とてきりての書葉成 括りは左の如

し

才巻号より 亦八号より 八冊

右は以葉美妙之人が筆緒とて近年の面

面世實せしもの 明治十八年二月より十

九年十一月二号より 一十年九月間

亦九号より 十六号まで 八冊

是は其記の非堂年成印刷の付たり

ぶるを氣の編輯は其書多 明治十年

下字

二月十一日二十一年三月迄三十二年一月
一 号より十六号まで
拾六冊

公書系 九卷 所九院中改訂及社
編輯の業 馬集 美砂 明治三十二年

四月より二十二年十月迄十ヶ月
但し十六号より五巻終結より業書ス

一十七号より二十四号まで
拾三冊

五巻と改訂 一巻五巻終結より業書

明治三十二年二月より三十二年十月迄

州 九月五日

通計 四拾五冊

自叙 明治四十二年七月

うらまの拾六号は五巻五巻終結より一巻
五巻の
脚載等々前のりきも 本誌中改訂の
所の種考
及掲載あり

我身多文庫面友の右改良

一 我身多文庫は十七号(本月二十号)より

文庫と改訂あり

一 文庫は中紙紙七千頁より一冊面改訂あり

一 文庫は定価七銭とす

下字

伊勢物語語意

おろし 男うひう ちうして

おろし と言ふは ちうと お節さん ちうお婆

ちうが あつたさ せせく 物語の初め 小便

る言葉なり

一説に おろし 男と ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと ちうと

せーとのか (下畧)

前子揚り 文種秘告の牛に古園お初め 権ふは

必ず秋うきとの成揚りたる 左記一篇の

如きとの女提いたるたる

雪盡しのせりふ

凱陳太平記

新田義貞

○市村彦藏

大森亮七

×大谷彦次

○「おれ肩との笠を冬無氣の月お値り

×「擔頭の花を不香の花お持せ

○「実や降積む雪の笠、月お似る水ど歌も

あり

×「本毎まつもる白雪を、花お似たりど香

もたし

○「詩人の目には鶯毛とならぬあ

×「下人の目には塩と見えたり

○「謝あが娘を柳葉よたより人

×「あらが心をきうずと見え

○「猫をうぢりく結母を降ると卯くべの雪

の空

×「犬は勇人でお叔母様のおとら雪の朝

ほろり

○「下戸は巨燵を雪みどり

二山
下
6

二三
下

×「上戸はみろりか銚鉈計しやうたけ

の加羅小白雪

×「豆腐小淫電

の「雲霧嶺小撞たはつて家行處いへのからう宗

の「あうー男の富士の雪

×「雪藍関小推して馬すまぬ鴛鴦うづまうきの

酒手ぬねたる夜の雪

の「雪の約束まる宵の大口口のつけつけは、

唐子からこの似る雪まらめ

×「雪あらげが雪打小戦いくされあぶせ即すなはち、

あしづゝ遺手雪ゆきせ

の「雪見の暮の床陰小、春はるあけとらけ雪

僅すくなく

×「佛もえをもと雪ゆきの 一の耶須多羅よすたらせが雪の

肌 雪が氷と陽ひつるど、とらるむおふ

じ雪の浦

の「雪の山の手ぬつ顔も、雪間ゆきまに咲け、紅

梅の 冬ふゆよ深ふかくさる面おもて

×「つらく椿水仙つばきせんげんが

の「寒菊、山茶花、冬ふゆたんざん

牡丹の富貴天より降る、雪の直の銀世
界

の「世界一疏の轟負成 頼し揚羽の標たら
て空に舞うは元来、ふれく小
電丹波の白雪

「ふつと降りかす丹前羽織

の「雪の白柄花うひらぎ

「すすがし香る一家の風

の「今自白見世の

と者例と

の「ホ、

「教つてく白す

右の如く又序と改題して 考案書牘の一手取

壹とさうしを弁拾七歳よりありし 成号と

「表紙の飾載成改め 神田 編りて成形成増

か 前号と成 其趣成殊うせり 可成と

是年の小説を多くを前回の終りものありしを

只自分の好む花つし成号とせん大團圓と成りし

「多田隆山を「稗電節松枝」なる劇

本双掲げ 演書堂樹軒「号真月」は「そいりあ

行きまゝ短ふ成揚く

同二部すまの道場兼月子也 古時浅岸門

跡付近子居住せり也 好古の藏書あり也

また人の知りぬ申すも深く元禄文学者

元禄文学者なり也 西鶴名白海其結同水行

まハ文字屋物も何れ申す 秋本身無成収

集り也 甚妙成合好の古く病す水一す

此中へ移りてを其書最初に記已とたり

露伴君との交深く、いつか之を孫又るの吹

聴き取らるるなり也、此書の如きものあり一

竹野一代廿等の於本は借覽せり也 之は筆書

し、その水も此本の雅俗もまた借覽し是は

筆書す、等 子の想を此の文通のりたり

す所謂元禄文学成其の紹介せし印字

拾を法し之を流すなり也、あり。

本号より前号の揚けしに等々の国民の友美好の

可憐に對して揚けし趣ありけき 甚妙なるもの

如き及筆成書せし哉 勇まざる等一なり、如常

の文 二つす印し併せし也なり、其時の書也

一を抄の如し

二
下
か

久敷打絶々言ひき
さしむら頂の胡蝶
たまけりつゝ内々我を
いねも千両の手
荒き中 赤いけりはやさし
つりきと
いとつゝお花の言ひつら
ねを言ひ
買言えり

物語草とたうはぐり
て光昭君のふ
う事も思ふおきん
ん

今せしる おろど鏡ともろ
ありの
えりしとくく人も
ほりし
第々との縁りりき
を中々
き疑き

我引絶々言ひき
今をそれが
も蓬月よか
ぶゆえ美 みるた
りせあ
の歌文

あ、我結と思ひ
立ちり
早て女の
名とす
めれたる
猿魔のうら
風

右近頃の筆のま
いかの如く
よ美 我某
多のせとも
とも 歩算
下たる後
を
まぶらす
るゆあとも
そを歩向の
まし
まきりし
あり

二月中の八日
美妙

とみち様 おとと

未志くちよ 糟糠のつま

早水たのふつーくも涙みくろくよの計 件

人の国果ふくめろやうた水と 道飛く是

此体多く美 十体外の一休もて 説諭此

と称ふく由 西行頭陀袋といふ 何くそ

う赤きさそく赤書小見くちく くの絵

海光 勅うかうを写せーこの由 先述

寿分側杖の迷惑 うちあそと赤大童 此氏

日蓮月うぐれとをてう思付く此美事よ 不尾

流くを杉割の片々乃此 今も一羽とや

と彦下向うは せんトよその物にう比丘尼

成見るまきうん 是のとおういん

野りま美 此 成絵一の返歌うて

あ、成絵と思ひ立ち一老不道する

肌いろの素いろまきを 後いろするあを

いうま是は 此氏を貞柳うぐれとてと律

一たー ソクもの志陪中おまー

二月廿日

結より

美 様

二下
6が

たう
壬午の二節

十二時鳥のよの茶漬屋山本^人着く ^{ヤカ}

「お仕度とは」何がある」^ハ山本^人の茶と何の

とを野暮の至り 言つた茶の角が返らす

いゝたう返すするちと ^ハ思ふは「お

刺身、^酢の物、^宗七鰯、^お茶扱、^煮肴

とつふ ^おあ〜いゝふ一服一泉の山本

びあくるものぬお茶のす様もたつたか

一ア、^世とまは ^法隆寺の什物とをい

く無くるる事とて思息せり水とさ

水と樽もいゝと ^ハをちんちん ^茶せ

鶴の積物一通りお命す ^程ま〜持来

膳のとの小皿は ^ハまたら漬、^坐禅豆

梅び〜ほ、^何〜水紫蘇、^燻梅苺、^すふ

のど総貝玉の抽斗^ハ外 ^ハ鮎 ^ハたを

辛子漬、^初梅漬、^加羅糖、^甘露柚、^辛子

び〜ほ、^ま〜も ^我まが〜 ^喰つたる ^事ハ

土産ふ花漬^ハつ〜ぶ〜 ^あ〜 ^おま^あて

梅林、^行りぞ ^あ〜 ^と南 ^枝北 ^枝十の七八

まが〜 ^中と ^あ字 ^ばり ^大・^失語

て

不可とたり香とたり梅の苔うふ

紅葉が句とてを以て詠にたりものけりし

たうらも吟詠也世々名乗るおれ

ととのとてを是無上の信道初一声ありて

榊林流也妙たりとて

天渺々海漫漫中よりうらうら松島船

給妻や二丈八寸そりかちえ技いた

砂石思後より成懐ゆいづりかま

一書一を紫吟詠の難風ちのうら 妻交り妻

解事ありて 遂に新流の宗匠と号せり

十九号を○月○日の衆行りて 紅葉の「やま

と眼目たる 新編おぐ まる「書少細言の妻名を

とて大杖きり 短編成揚り

やまゝ今作少後の披露たり 今もく今作由

詠の趣向たり 最初より趣向のお合も文師の

お流心成り 初回お引きたるもの巻序

今気儘な書致しと 吟用の者をその趣向おま

たに水が好むまゝと変化し 互に人困らせり

早稲浦向 ぐりあゝか 行く浦向 豊つる員様とい

女の心剣めたるさう

小説

そのもく 合作小説とリヤル 一篇の小説

或教人 一を伴ふたう 其法蘭多を順序成

定め つか心まかせ小題成設計人物成点

あすの心 第一冊を第二巻がそまふつぎ

一かゝるもほろろか」と筆成挿す 第三巻四

とまた先かたう ともすく鉄々を道向成

五に結うが心成 善人 二点成セー人物成

悪人とさう 美人と思くをそれか化挿

長命の積る節の相成 善人の出来さうも

たれ身まが打とまらう祝言するたをす

へて道向のつきつまる 叩トおし新成如葉

文師とあつ揉るる成 言文一致に雅

俗折衷はう 冬著者の 心まかせ 藤原却

つと猶成達成 葉のの出来はうかとも計

う心成 今作少話のおうい成なる 未

る世一白さうお目まう包づー 五番号を

第一巻

紅葉山人

第二巻

思筆外矢

卯三麦

春彦九華

卯四麦

吉木山人

卯五麦

眉山 人

卯六麦

雁山人

然しそすの合作小説の第一冊を 卯二十一と

2掲載せし我以て 後ふ之成述せしむりどと

欠す用 ~~_____~~ 後集或困まらむとやう

とつふ書櫃を ちうーぬの 妙不可思議のもの

とちうと 送る所が所々分ちて仕舞はるり

て 千徳中進みしを ~~_____~~ とるゆり **未完**

卯二十号を 月 日の発見ししを ~~_____~~ 也 読者

皆前冊の續きのみなり 此号は田舎が 子業

を懺悔の詳向る を懺悔を強て記せしむ

お母の初めを文庫にせしむ ~~_____~~ 吉田彦彦と

とそせすの ~~_____~~ 一巻なり 事たりを祝

友此文庫の ~~_____~~ 読者のの嫌何れも

筆の活字 ~~_____~~ 今集に同する一り ~~_____~~ 記す

~~_____~~

巻終り 悔ぬ春の今集の序文なり 是迄と書は

6 下字 =

人なり 破支死全師 くるきその先垂の以世辞
りき 一回痛し入つた 中堂護たふ 然し
正梅内女と孝子と しか大至るその今言た水は
まの影即ち左のよ水梅の影り書り

持信 新著白種 養是うき所事を書けよ
くの貴系 此反事匠の者 一先り以来り
くくろ 小風 ぬるし 何の思体おつるぬ
交著人 新言 一芥 文とす水心 戦玉とた
へた たちろ 見花も引合せりした
後 所難 何れた 又例のこ 切ら浮く

美如 言信の文章もあまや せろろを免
懺悔の常橋お示 被下美しん 可名 三洋
我訖し言けし 一のぬ 天棟漏う 雞一と
と編みくも 止とせ 水も不叶 勿論持見
ふ不皮とも 小書書の筆の経橋もる 是
司藤 一の書友と見たる 事す水は ほか
るの料 ぬるるも けら するたがト 4
壺の馬以せ 臥産と 之三師 くるるを打
る本 諸葛其と名 自うト けりあはるる
き成 同 一つ 小評 せりち 悟 一

へー またお筆君も此評きりたまはん

去るものゝ新著白種よつて下名 今一言

と言けぬ身と一 別々思付 筆お綴り

評の代りふ美々美 以採用らるる本意ふ

り 句々相音

二日廿三

春のや生

眞村吉三君 破北

本著より評文の序文を引きてきて本文より

はたのめり

近頃批評家某の君 我身多文種成評一也

文壇の梁山泊と言ひき 言ふや及時雨を

罵して誰そ 今多きだ知りてたつれ

ど 智多白字の智 去行者の武勇 其文章

のそ 炳燭とて一人の知らぬる美妙な

る美妙の君は除く() 艶筆とて古

雅さ、お筆君を立田川の昔お惚けり

怒撫々 其流瑞きき思案成史を 去つて思

事おの神託ありて常々を筆成筆とて思

ふ 連少人の軽々を精妙なる 誰か春

連の如しと言ひさうむ 眉少人の得意の

調格 世有の 許ふの 紫女の清女
流きがわづら 乞流きよ流氷す 艶河
の似え艶うかたさうす 美人の肩の志山
か 山う肩の肩の山う 〇 おほらげさ
が中々たる 物又九華尾の筆の跡 花を
紅華の似ううとを解目あり 紅華と花の
おまはらう 紅華をひきみ花を胆太一 七
重八重の候さる安 雷ま一 面白一 夕地
よー 香華梅緑尾の筆 おちつづく長閑
たう 懐きき香梅の心持を断ふか 以蓮

とて優たし師或書り少んを 讀者新編
の蔭のまづと 杜修成すうの思軒ぐ
それみまは麻淳君の法天 とうまを
言すはらうたり 眞美人 ぬうひきみ一人
を知さる 梁山泊 たら小評さらえうす
よろもよく 接し くのわ 女同首射君
の斎まて 初めを請ふ子見るととぬ持り
夫坊う世様ぬ言めうを何うゆと う
と成人の言いと異さる 近景ふ少説成書
、もし人とを露ゆめりと思ふは純は十 硯

友我の人々を 満身都是小説する 我
又その未来を語りては 頼母一き又妹
一き人々のこ 其頼母一き人々を爪牙
と一 又他の誌名亦或と二陳三陳を備
へさせん 或友一 新著百種を出せば元
本何人うと言ふ 是亦未利の人々を
足 我文学を忠実たる 友人官お告る
君后う 新文の未来頼母 うらや
妹一々の解り 頼友社。誌名を向い
又八百の才子を向い 予るを死ふと

は 新々を文壇の梁山泊と云ふ
名は 秋く礎支社を向すト云 横く早水
く 祖国を向い 或日のかる國成しを
子世絶のアゼンヌとたうしめよ あり
ながし 是れせん とたうは 小主義のお書
新旧の別を向いしきまあらは 其全
心しを 斯々の泰産を画する 和平を
うぬる 持参の政事子分大國 其
ふもの故 和平なる 文学家お世 其
左理の者らに 余は今隠れ居る 絶え小

競ふ筆を取らぬと 去らざる取らざる
ふふふふふ 著し取ら我が拙き筆の五壇
成活よしと皇々の子 修り志と筆の
と筆を又 又大膽子又壇子書り読書と共
と馳騁せんと田子 但しお氣はしとふは
非子 何ぞや 子の高き陋者不正の文字
のこ 高河の筆を惣て (至義の雲泥のれ
蓋をあらも) 筆の終筆の友を心とた
まうたがト希光ボルテヤ、ホトが成り来
才 ちとふお筆の局の者もも おレペイ

こイザル、クラウサスのめき 又老ラ
クタビユース、アントニイ、レピダスの
如き成り来子 只嫉しき者ラフケンス、
サワカレ一の文、ゾーラ、ドーラの友類
エバシノレケス、ペロピダスの愛國
……具心をも予が之は團圓あり 読んを
たしよるる 読書地成拍つる無言
まな著書に筆が自序として たる方成掲げ
二人此處厄を織悔さる 例の九筆、未更
樓、思葉、成埃、埴、眉山等、バガ机取

まき 言葉たる先大口開く笑ひ 園如
 葉若気の若く叶下またく 好色の書成書
 ずか 鳴雨等朝の暎を兼走の林支の利斬
 ぐたふか 其も色懺悔成題 了くを妙齡の
 比丘尼二人の少年の履室の奇遇 古成
 終る今我差るみあふと柳色 一字一埃の
 大著作 即ち是と落巧コトバき存移き 妙中を
 牛のたも船水す腹成うへ
 さくも企涌の志何ら さま 夕様のあか
 んさま 茶書狂言の教コトバ始陽コトバの情さかうく

悲しいかあが 尺八の似左大吹升 い
 のたう 音成やあさうも 雨性コトバ紺謹 雨に
 善馬 ちがり書の指背物 或は怪我の切
 名不見らるるもの 出集すまに計り少す
 雨の悲哀小説 一人が深小袖の具此其
 最のらうに 一を言ふは言ふを間違へるさう
 鶴鶴は清成品さす補は汝成渡うを死す
 鳥の智子 かがる 紅葉 毛柳の思ふに
 万々悪太郎 帯しを物笑ひの種さう共
 我等の知る 処さうは

我知く憂有り 蘭亭が知く憂有り
向子横所の東坡云のよ我に教てりよ 貪
家老降く地成掃き 盲女老巧に踊成振る
隨ふ骨成折つるや つき見たるいと 六
世にが宗者妻のの如き成誠む所江なり
己れ諧謔自ら喜ぶと涙なきをいふは 口
ちを富むると慰言なきに非ず 主は力成
盡るは経鼻横目のすたる事 ちがふは
のみとありがらむ 英國のシエークスロ
ヤとソウを 鬼やも非ず秋も非ずして

一枝の筆ふ草家の人情世態成寫しを
泣くやうにも笑ふやうにも得るきいと聞
く 水も隔りて下男に掃くめ 隔
たりてを證結小振うしむるものる水心
手細工のほふべきふありゆいど 紅葉の果
は候なきか 須うらうとあは書罷市の暗成
待つる世の着言ふ向ふに 浦成書通
て 其底小校成の接成見るか 林成
目しを 其奥に插櫛の何れ成知るか 藤
忽か 一のたもふると 咳ニツ三ツ 一回

嘲笑しよしよ 天水桶の較龍湯うす
芋島に桶樽をくす 紅葉雨の非望の著件
を較龍の天水桶の道^{もと}より為成めき 桶樽
成芋島に揺りし地成荒中 笑止くすと
帰り行く 併備の具

紅葉玉乳煮くちまきを見至了 下は二
三天とむすきつを衣紋うみつくろひ 大
市の君女子向つを今常周舞しを曰く 哉
方の才学ととより夢幻の人情成思すふ
葉と一人得可なりさる哉 何す世間の

規が門前の輪 今ほがいたる葎火の言
は 人成見下し嵐雲子散す 一面の肝腹
けんのぬ々だけの甚話 三年の夕色下さ
るく ひとふと悪き小奉り 毛懺悔
成見をかたしかり 涙成後すもろを雲肆
の美人がゆりるがの悪評 一の六人の自
まふらば 成ぼらしや紅葉の為ふ置殺せ
う心成 他人の向つをたふを悪に雑言お
心まのせ 成と六人へをコレいんうりく

明後三十二年小養生日

戯作亭の南軒小

紅葉山人 戯誌

その緒言も續きて「作者曰く」として 左の断り書らる

一此小説は疾我以て主眼と臣

一時代を説く十場所を定めて日卒少殺子

は少敷少片一いある時のものつと好

心小試みたる難者何ははは時ある裏

ろくある人々の身のと譚と号少づ

一文は在来の雅俗折衷あり一うと臣言

文一致士のと一うと臣を之れは挿し

めりた末鳳の雛か一虎の稱に少し子

も判教のたよりあり一風雲様の文解

世創出あり何まうお多板多話より子

とつとと止れども作者の苦学はいつと

かりを以てせしは返名して中評判成ぬ

がよ

一帯語を降臨臨解し今時の俗語調を混ト

たすもの也惟みたる少少成りて時代小

説の談話解るせんとのと作者の苦心

一前述の通り世間在来の文とは下手な
了も廻り置るに比して諸人一見してつら
ひとらふ作者は亦しもつらうに我つ
らつらふが如く人の何故子つらうといふ
や専ら句讀法にたよりし小雨後の片面倒
成詩よ

月 日

紅葉山人

此の前置きより終へて通し
葉が多少世へ向つては此の作は葉を世へ一
葉に在るは 此年我葉多誌すも葉多の作はつと

つらうも かつを内輪含ませ我面白 夢の一
評判豫期の通いあるにりもさきさきの著編は感
せうさうも かの一篇りらうも 不
之界の向つて満ち引て致ちたる第一矢 甚
保該因自水が後事より行ふ 歌響甚大なる
む かの意の著は葉するに 餘り 且つ
あつは 子は民の文學成りて之身葉葉の礎と
あつんと 或は 處女作らうと 不
結果不評判の終りは 田の筆成折つて他へ轉
あつたの著は思ふよりいふ 此の美妙なるは

上々合意の礎支社成接々 都の為ふ「」

つめふ用民の意ふ 言文一致の大禮成りて

、才筆奇意の書名隆々たる 上々眞打南翠

挿菊の海の瑞生集も 為の「」集の支輝成

銀色うれたるま時 其對美妙對世間の麗中作

と「」 此も又所い流りの言文一致「」下さ

る創造の雅俗折中紳 の「」か「」か 行ふか

行「」めか ~~有無小隅と~~ 抄出せん

る「」一巻 外目「」は優気も「」も 内「」の嚴々

臨公たる みる「」心配成り「」と「」たる「」はあ

う「」さ「」 みる「」は「」年「」集「」自「」る「」法「」は

る「」も 實は山「」の「」たる「」さ 評判する「」まを

はまつた「」存「」る「」る「」様ふ「」か「」か「」一「」た「」さ「」と

ま「」さ「」る「」る「」維「」め「」る「」に「」や みる「」礎支社「」の「」連「」年「」を「」て

も 誰「」人「」と「」を「」さ「」の「」作「」評「」判「」す「」め「」れ「」る「」一「」に

葉子の「」中「」の「」ま「」ご「」の「」苦「」心 何「」卒「」世「」間「」を「」も「」十「」う「」六

井「」中「」の「」ま「」ご「」の「」れ「」り「」と「」祈「」り「」め「」は「」る「」く 上「」の「

本「」功「」成「」 ~~祈「」り「」め「」は「」る「」く~~ 確「」る「」美「」妙「」の「」礎「」支「」社「」成「」接「」て

る「」る「」も「」あ「」る「」 ま「」ご「」の「」美「」妙「」の「」ま「」ご「」の「」成「」接「」る「」を「」て

1311

又蹴踏さるるをの用者ハ世にまらざる

夢の中の内景成知抄きたるぬめり

思ふに堪へしを

年一七書一交市のみなるたつて

世々の如く評書とて

の声は美妙に響く

得るれば

夢の目録の

後と称して

中

三

二

一

一

一

一

一

一

一

只

唯

唯

唯

唯

唯

唯

唯

唯

唯

ちのニ下号^ニを^レ終^レを^レ廣^ク告^セ一^レ今^レ作^ル少^シ法^ヲ或^レ指^ス
一^レ一^レ圃^ヲを^レ紅^ク魯^クた^スる^レき^ニ或^レ終^ル合^フ何^レを^レ連^ス下^ニ讓^ス
り^ニ紅^ク魯^クを^レ殿^スする^レ事^トする^レゆ^レ連^スの^レ序^ヲ又^レ左^ニの
如^ク一^レ

後の^レ往^ルが^レ先^トと^レ是^レの^レ事^ト也^ト号^スと^レ是^レ指^ス載^ス
今^レ作^ル心^ヲ説^クの^レ先^ニ陣^ヲ 紅^ク魯^ク終^ル合^フ何^レと^レ言^フ
て^レ已^ルゆ^レ推^シ付^ケた^レ 和^ヲを^レ易^クし^テう^レあ^レと^レ思^フ
一^レと^レ号^スも^レ請^フ合^フた^レ 然^レ一^レつ^レら^レく^レ お^レも^レ
見^ルゆ^レふ 吾^レ今^レあ^レる^レた^レり^の智^ヲ要^ス終^ルを^レ
社^ヲ終^ル妙^ノの^レ種^ヲ或^レ附^スる^レか^レ 今^レと^レ世^ノ終^ルの^レ下^ニ止^ム

三^ノ連^ス平^ノと^レ踏^シみ^返さ^レゆ^レと^レ一^レま^ると^レの^レ折^角
の^レ根^ノ鼓^ヲ橋^ヲも^レ化^スも^レ殘^念 也^レを^レ骨^ヲ折^ツを^レ
何^レの^レ夢^ノ也^カが^レあ^レる^レ 是^レれ^もす^ると^レあ^レる^レ子^ハい^ハ
り^のの^レ對^シて^レ或^レう^レが^レき^ハい^ハる^レ 野^ノも^レ山^ト
と^レあ^る 又^レ題^ト 苦^シを^レする^レた^レ 梯^ヲ或^レ讓^ツを^レ
也^ノの^レ連^ス平^ノの^レ弱^クも^レ或^レゆ^レら^ニ笑^ツを^レや^リ
た^レも^レゆ^レら^ニと^レ ち^レう^レふ^レも^レ其^レ或^レ疑^ラる^レと^レ
見^ルた^レが^レ 人^ハ或^レ終^ルす^レる^レゆ^レも^レ五^ノ六^ノ 人^ハち^レう^レ
ま^るが^レゆ^レゆ^レ苦^シ一^レゆ^レゆ^レを^レ...^レ 其^ノ苦^シ一^レま^るぎ^ニ
ル^レ二^ノ柔^カ一^レた^レが^レ 柄^ヲも^レあ^レい^ハ土^ノ時^代の

様々思はる

此号より雅治の御教紙抄め一頁以下二種と

し 紙抄成増の 全部中ノ上ノ頁の二冊と

引く 此中思案の起海河可受子定結と

今そ一部紙抄きてる可 百時文 例と

……うちより七八冊離れを田の甲とある

様々十高の旧跡見事一た 寛政二年

運在一の石碑に何うまは 詠天も此都下

の通る程がわき高申すは 頼朝の玩子

たらしあう 吾れが今名田畠 権海年久

つと 吟とらる 新造未登子結つて権要と

まきうのも無理は何うまきん 半里はかり

の西下越田女割れ 獨りてくく 歩行

う形ち日も漸く暮れ づを来す！ たの

う 帰る事ふ暇集つて三高と暮れ時分は

雨と 甲ちく 降と来す 一 妙美を

筆紙抄まきん 下 ナア一ニ方一佐橋

うのも再一興いと直悟一みお言たがら

馬成降りを行く 語ふ足強一た巨勢去元へ

飛らつて 山門のうを 明徳の五右衛門

と、少松を雨止お世に石町は日もば
つたる暮山を志まひ 地ふ跳く維新 松
の鳴く梟 所の九葉たふ言色新詩を
啼りやいそふとある 暫くたつて雨
の止みませし うつ此内をいへ 病の千景
屋ふ一泊一き一た

思慕ふ言文一詩を世の皆に風うを 念ふ又
限うに世の言文一詩を 結る人に向つてお
活し申す風う 取らま一た「おが」のうを
の御座るはしき一よりのり

また此言ふ思慕の催まともいへ 風流又言ふ
とつとつと 孫考は為す 中一用を 謹歌
世美人の形考と一を 文章は六百字 江戸に
了 又親友所の詩考と一を 我書多文庫二号
三号十号 古所抄の内帯は古郵送と申す云
うの 障考何う 古時多抄も 京平改定しを記
ゆの 備録すし 念存せし 考のり
お二十三日は 七日甲の 考り 考り
よりの 終篇の外 新加盟者 函件考の一 刹那
と 終篇は 拙稿 子子の 文章は 考り

今篇 戒

雲霞の袖より来る候

言居侍福徳也 苦悔り候あぢ孝女より
たす故 号子見する水寸る水たる無心の方
女等 左様の恥と思けは自戒喜も多うう
人た水共 ちかちか小似陸とるうを考り
水心 移生禁欲のお徳も縁成り水心 祝
る懐汁成す めるも添と見たりぬ美あり
そ水も 離る人と 離るるがれ 幸ふ
事のおおなり 祥光 ほうう 乞食も 貴

河水が 田舎者ふりのガニ三本折り水心
うら 振性面太ううう ちまひえ ちん

通けり 玉ふ美任高の某様も 醫薬め右様
と言へば まねも 船乗の鐘櫃も多うと句

飾りも 葎言つゝまうり づる づる
た安眠瓦の息子殿も おひうの長草とい

了るまゝ 産婦もあふふ 雨上りの 新地
今と真利もあふふ ちき書い申し 果言めせ

うら 身でうらるる 三人すしんぶ さま
しき 冬の 評判 女の常は 睡毛の長さを

その人を備ふるに存りぬらん。伊勢
の修束う十新比ひやう十様を整備しよも
ち地のせんと博ふよるけしむ自然自
由の道なきしや。奈月所んく、要るる雷
の如くふらう申候。弱お扶け強お子居や
ぬ喜地、酒長し乞。和ゆえ左様ふ思えさり
し多様ふ。ちちいと、た意なき張りうら瀝
のトおれた味も盡し。惚れ左に惚れぬか
ふかり多し。ち水乞筆成りて、さるる水乞
所文と石版指のきまう文句、轉るる右

世言文一敬。取らぬ人情の微細さうの
り、甜きちとたれ心。下度がら、いも運の
つき。下度がら、いも運のつき……
吉時、卯うらう、西鶴、成淡、
了。是の終まに、お著る様の風流、俳
文名一
時の秋、白、水、
て思ふ、さう、さう、お終る、う、
その二十三号のけ録、
少松葉、さ、送家、揚、
是、お、さ、南、城、さ、多、
た、さ、要、女、作、さ、

二十四日口金年七月四日 念力 局内 枯尾元

江戸の水 蓮の池りよの正記 田葉

新著百種の作風 心く書する 江戸の評

江戸の風雅 娘の影 書する 評書あり

江戸の水 ■ 娘の影 寺町屋の作風 ■ 寺と

のろん 江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

江戸の風雅 寺町屋の作風 ■ 寺と

と暫く考へ

一工し可憐野花色……と書居し一ち

あかしくぬ 今よりりり 鬱茂所望

花)

一可憐と云はれりとは……所作^{しつぎ}もや

まろ花 野花の色は大小^{とく} 器品がよくと

い)

一亦水も唐書下^{くろ} 流暢なすへ)

一詩^{うた}成和刻下^い 語もはそあく 器^いろりか

は……)

二時々今の對句は……)

二かろ花 偏^いな多す……)

一今の時候ぢあ^あ 茲^あ 寧ろ……と書もの花

一正下^あ 下^あ 静ろきらし 偏^い安^あ 散^あ

實^あ 産^あ

一早^あ 書^あ

一散^あ 書^あ 之^あ やぶ書と書く)

一やぶ書を散書はり 今は中^あ 新^あ 新^あ 不^あ

子^あ もの^あ 花^あ

一野と……と書く 散書對^あ した處^あ が牛^あ 附^あ した

1180-279
しん

一若し教と一何と教と(か)

一すむを教とすも一 在りて正を

もすか(う)

二もし教を正とす(と)

二ふう一人と云(や)

二墨きやあ(い) 西人(は)ハ(い)

まを正に記(り)ハ 子が正に記(り)ハ

り記(り)ハ 其結言ハ 亦或ハ(き)キ(き)

成(り)記(り)ハ 已れ記(り)ハ 亦或ハ(き)キ(き)

之(と)約(せ)一(き)の(き)記(り)ハ 可(き)子(と)ハ(き)

き記(り)ハ 性(善)の(善)記(り)ハ 亦或ハ(き)キ(き)

せ(ん)記(り)ハ 一(き)の(き)記(り)ハ 亦或ハ(き)キ(き)

の(き)記(り)ハ 亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

亦或ハ(き)キ(き) 亦或ハ(き)キ(き)

うしき教まりのし挿み—ハ張ふなり 由
子の浦打おろし 白妙の亭幸ハ眺りぬす
三原の松系涼水と見まらふ 天人う
き教もま— 薩院二つのトハんは過き
て—まがし天施火井の鉄橋 新報こつ
しこの腰つぐ—ハ此ぞ—
まらぬ号年 紅葉思葉の秋著る種 **乙** 廿心風
雅浪のね互評なるや—

田葉 **乙** (音響) らの序みか—見—を
本編の主人公おお代々を替つる名詞ありサ

るんぬく

流りか知りぬど草水ぶが方うまい

まくと名詞をワ—マ— 草水入つたよ

ぶすふ

本文—上下とも見出—老明のハ文字

屋 まが類—をちか—てぐ 俳諧娘で

名をおお代 小姓の者三よ— (オイ—)

あまんたい (ハ十七下の一) 窓を名を野梅

お水えく— おソをちちうたネ かくん

う—とを道徳の筋だがお水えく— 一帯

し 下

まふやの字の疑ひ（うぐ） 甘い（うぶ）

く（月狂乱の悦極） （初雁や並つゝ）

を（武夫の恥辱） 耻ぢず

まて（親近人耳義授神）

明（ウツ笑は女やがう） 程読者（授）

う（味ふ手用華成つゝ）

山（山巖の水邊の挨拶） まる（謎） 謎（謎）

居（中思） 九

十七（十七の結末の流さ） 新考も（直） 直（直）

新考（白造りあり） 成（成） 上（上） 包（包） ころ（ころ）

ソ（ソ） ハ（ハ） マ（マ） 人（人） と 鏡（鏡） の新考（新考） 一（一） 樽（樽） 江

戸（戸） 飯（飯） 甲（甲） 紅（紅） 華（華） 殿（殿） 行（行） 九（九） 十（十） 七（七） 十（十） の男（男） 勢（勢） 不（不） 借（借）

老（老） 丸（丸） だ（だ） の結（結） 布（布） 舟（舟） 多（多） 人（人） を ま（ま） る（る） を 其（其） 結（結） の

言（言） 文（文） 一（一） 致（致） 成（成） 書（書） きやア（ア） 一（一） め（め） の 一（一） 流（流） ぞ（ぞ） ぞ

甘い

方（方） 少（少） 許（許） する 好（好） 業（業） 分（分） て 女（女） 心（心） の評（評） なる 如（如） 一

十（十） 田（田） 金（金） 道（道） を 悪（悪） の年（年） 込（込） あ（あ） 小（小） 善（善） 之（之） り（り） する ぶ

元（元） 中（中） 幸（幸） 作（作） 者（者） が 志（志） が ぶ（ぶ） り 技（技） る 上（上） 景（景） 湯（湯） 上

し（し） 今（今） 丸（丸） 芥（芥） 海（海） 拾（拾） て 一（一） 所（所） 小（小） 犬（犬） も 喰（喰） は

15

田舎 ■ 晴管鳥 ちくちく 送返 揚く ちん 露 伴子が
刹那たる 上品 何う 自分も 示 何人 物 語 たる
湯器 物 何 何

才の号 小 社 幹 尾 跡 取 業 ち 捨 奥 奥 西 人 の ち ち ち

「 硬 多 知 成 解 野 子 」 云 々 七 種 考 何 う 才 の 字 同

乃 了 迄 来 才 の 文 庫 の 裁 り 書 法 考 上 一 紙 一 毛

乃 々 一 ぬ ち ち ち 抄 事 考 上 の 何 刷 料 の 考 考

筆 種 一 毛 少 ぬ ぬ 一 西 社 幹 が 迷 惑 一 上 方 考

う 且 且 以 儘 認 多 死 一 毛 考 考 一 何 考 考 一 毛

別 局 免 借 印 の 金 毛 何 考 考 一 五 福 成 一 紙 一

と 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

確 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

解 野 子 漢 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

一 十 六 号 日 以 前 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

社 風 扇 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

誠 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

工 工 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一 毛 の 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 三 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

白字

と心 疑同標と釋す 柔同の志一に

り 此心、けりて 種子の墨説向る 本説

定らざるは 其一ニ成聲心む

(a) は耳の形あり 耳光音成す取る道

具る心む 美一す、ぬとのは本百今然不

り 美目形の成故疑同標よりたうと

ソルル 何マラ言くとす取れぬゆい今

夏は「心」の様不引立耳成しを 結うはす

う心 凡情成すすあり 以時お母が驚いぬ

たと 二交言ぬと風成引くとす(一) 有らぬ

心 疑ふ「心」は百の形うはうに 耳搖き

の形あり 百垢があまり、涌るをす、ぬい

ゆいよくほとらるを 今をばた、ぬい

るす、ぬい、ぬい、もう一交とソル心持成局

と疑申したる、ぬい、おマ、ちの銀は性、ぬい

驚いよ けりて、ぬい、たう、曲つちまつてサと

ソル心 疑ふ

(心) 疑ふ一疑ふ「心」は疑ふも似たり 疑ふ

るも似たり 疑ふを疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ

疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ

疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ

疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ

疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ、疑ふ

向の記標、ナルル、元初、まゝ、り、り、
「古義篇」
念、し、ま、ん、か、こ、こ、を、古、義、の、雲、の、字、あり、
雲、と、し、も、奴、は、昔、し、り、不、思、後、も、もの、と
す、り、「俗語考」不、思、後、も、もの、と、
い、ゆ、ゆ、り、ふ、「お学」唱、歌、集、字、
露、の、雲、の、は、
た、雲、か、是、花、枝、露、ふ、心、あり、何、も、致、せ、怪
し、ま、雲、の、振、舞、ぢ、や、な、ア、因、つ、て、奇、怪、の、も
の、と、は、鉦、向、ふ、是、枝、用、る、も、「ま、た、雲、ぢ、や、
ち、り、い、い、と、い、ふ、洒、落、成、象、と、現、け、し、て、用、か、
是、思、傳、な、り、可、秘、可、秘、曲、終、江、戸、揚、示、

「助六」さくらの鉦巻は、
「その鉦巻の所不審、

とせ、り、ふ、り、る、を、海、浦、流、つ、その鉦巻は、
「ある」といふ、り、を、振、り、あり、
「は、こ、い、し、え、
「下、思、

の、め、
「ま、た、鉦、巻、を、思、考、の、最、集、せ、
「美人の形意、
引、結、ま、て、本、号、を、揚、載、は、

二十七年は、
「露、伴、子、ま、た、利、那、生、死、成、お、は、
「陰、山、の、劇、本、
「号、を、結、は、

山賊 田舎の音師記りらけの空まう

(意の山賊) …… かの山賊生ぬ人界は夢に

て以来 初めての、ふ女子達ひたり 東

京の土産ふ錦籠とりつもの辰 新田の籠

つ子ご見せしが 廿の中よその籠の様ふ

美しひすのらるものとき 一向に合点た

りごたぐ 水おえ籠そら奉とのみ事知

せしふ ちルはきとそこの籠ふ増しなるぬ

あまう美色子まらみえ 廿が批子留か

おらのまら 若麻の産みちる籠 ……

若しうかと思ひもやうに つくくくと

まがめそまらりと笑ひ 頬のそめ綴糸の

ある肌理すくまめらうしや 一生の思お

きたとらうまらと 爪長く節々ルまら

本^や脂子^や深し指多え 臆しまがらすく

とせし頬成つ、ゆえ見 ちほ深入しえ来

唇成ひゆり指調ふつく 急^ま成嬉しそら子見

てしあめえ四邊見面す膝お載せしゆ小

重みお量へ 位置成替んとて女の腰の痛

おらあらがふが爪先おふと若水むあつこ

16p-2

と叫ぶ声小漸くワグき...

その号は古書集所より 露伴が凡流集

近き年に出版すべしとの猶告りし 如夢の危

懺悔と念一也 子の早騎りしと 名乗る

号けし中一篇を 永く

文壇に **黒塗り**

黒塗り 文庫は 去る明治十八年二月に

我書多し事の名は以て創めを今迄の間は

一以事 叙し来りたりしを多量の吾意を

四回重ぬると四十二年 年成遂す

四十年と七月 遂ふべき成りて後利す

去りぬ 翻て重なる事考ふ 如夢田舎美妙

摩訶居士山 溪山 蓮琳 松水 蔭桂 丹 柳 辰

自号のゆき最初をほしの **黒塗り**

黒塗り

白くて **黒塗り** 朝夕の徒事地事

は **黒塗り** 珍本 新稿 かな かな かな

ゆき 秀文が 功事 かな かな 一文 抄事 此 法

はす かな かな 一 章 成 かな かな 批 評 海 難

と 茶 葉 かな かな 三 題 活 かな かな **黒塗り**

黒塗り

自身が軽洋の如くなるものなり

礎反社の沿革

辰崎の書

死に即ち死の年代記を修めんとすといふ考成ありて是等の書は修めしむるに
た物老幼供一に考し我れ記憶す
消へ去るに事重きもの多し
分一人に筆を執るの事 十分ありて書
と深し行ふの事 十分ありて書
往來し居つた人達不同今世に 各多前
りト事重き事挙げられしは其の事とす
書く事といふ事あり

其の不便なる事

于号朝夕小往來

し之を事見せし仲間の大半を 始
りりト之を事見せし自成志の人下たか
つたりト 今日なる言事ありて
の事ありしに ありて事 二業ありて成つる事
るものなり (河田の記) 于他裁判官も亦水
心(遠東)の如く 雅名を花が董(今此も
あり(自分及) 藤田福雨 澤田雅子 細川
月名) 喜多川津彦 鎌多の 驛長もあり

安藤洋水) 中ノ世行街の石物と云もある
(平田錦葉?) 物故一たのもある(松野緑
系 中村花雀 松野緑) 正銀とが葉の蓋
少く下自下疎遠不惑る 長い月日一を
四市子郎) 一きつを 此市も命子のが
徳却^{カク}で しくうく) といふたがト 今元
二善牛也す) 居るといふ所まふん 今元
お活方、9名^見の荒初を 年月を分作別
一と記懐くは居えりのふすのト 陸下私
の田舎も多からうと思ひます 今元他

日さく正一まは
柳も祝友記の記つたふ私を先 私山田
並妙臣(自注) 坂別号成推排桂服) と意義
ろあつた) が其勅様をありますのト
すともの際の右要我申すやと置く外要
可^カ有る 明後十一年の頃でうすま一たが
連立の備好ふ 和二中家といふのが
りました 一ノ橋内の和一中家と對して
和二といつたのを 今元私が入子した
叶ふ 私さう二級と云ふ田代左衛門をす

年が居つたのさうか 此少年は至徳年の
身才者を向うたが下 漢文でも国文でも
妙歌も詩も教作も 字も善く書
ソレ一畫もチーは遣ふとりつた様も多藝
の才も 字體も中々の成績をあげた
今は核年評判の少年がた 私光十四五
の時年をさくくの異心者を 謹書の時
同我此の運命場へあて 瓦廻しも遣ふ
鞞鞞飛成やふ 石ぶつたふも相撲下も
撃剣の馬心下も 悪作劇は何ふも好まむ

一たつたも唯今下も 舞の嫌ふ言ふは
舞うふ少國を核場言ふ 屋敷場へあつた
ても 我々の仲間にはつた事はある
超然と一の獨り静うの故一と居ると云
つたやうな風を 今考へると 或程身
才詩人めと言つた態度があるまゝたよ
丸花注 ちんた風を自らお初めを遣うた
時も 確小温多君子と見た 荒れ者の
屋敷も不持も自らも 恐互死う多つて後
も時の取組ありもや此を要の印今も

さういふ山田はのりて者かす一は
らういふでしやうそれかててしやう
と云うは様々大い尊厳の言葉遣ひで
いふ妙のりしやうそれかてたらうか
そののりしやうは始終産もあらず
一はさすの邊を男が一はさす死
成誰れを後浅草河原の美人は時つた
との自身を金主とあつて書生は長成
た一はさか高利貸の者しめりしやう左人
中成廻りつたとのまうを浅草の様ふ評判

すへたる印を誰つてとてさすたるう
るさすのりしやうそれかててしやう
く書みあつたのをあまかさうもさすま
さしけれどもつらうフレンドシップの本
まうたのりしやう
大も眩々詮合つて見るとさうさのりか
く是國一長屋の一軒をた隣国を
てても一緒ふあつた事もつたらうい
様々事つてしやう
しをあつたまうか下達するも帰るさう

幸はつりも行く 池も来り 云ふをて後次
外の交は終上やうと来たのぞい
私去程よく女の中多我ある 昔の堂言下
叶ふ存つた 大学修備門の妻懸科専門の
三田英多校とソノの二種学一申した 云
ルリト大ニ修備門に入つて二年経るまで
少田と老彦信不道の状であつたのぞい
それこそ別ニ理由も何もない 實に
校が違ふ所ト お互ニ合はらうと 明
も明日も無いらぬと云ふ 堪ふと云ふを

あらたのぞい
すゝと私に二級と来た時山田の四級小
ハつて来たのぞい 幸ふに修備門の外
した事がある 亦二中子多居た時ハ私
より二級への山田が 修備門を名二級下
の組ハ入つて来たのをせう 私ハ何故か
幸ひと思ひつた 幸ふに言ふ下際うつた
のぞい 新設のぞい 幸ひに云ふ 幸ふに
云ふ塩やうルとソノ修備門 幸ひに山田も
私も修備門を二中卒時代と見らるるは云ふ

と居て一頁の、狂歌も二半成携へて
後海成と下すも大きワッ
も形事前より老を而自らちつた
改しと見ると 少田老を羨成はつて立た
るといふ精神 私も左様だ 新の此成
抱いたの老 秘傳門の大家して一頁許是
おその事もあるが 少田老の才二半子
を弄る時多うと早く書か
たういのでん 一年子志成抱つた
私をまだ少田の原は抱つて見たりたの

であるが 此のうきは 已より三景詩い
少田を既小望詩成る。一篇成携へて
既い信成待り書かあつたの老成何なる
然るよりの成書つたうは 是非一語
と批評しとくはと云つて百おつた成も向
ら一冊の筆成成 和不見せんの成ありき
た 其の語をアルフレッド 大手の事蹟成
化録にたとの成 又事年成馬成成成
書よりん 成事と成 和成古成携へて
た 其のく 批評と成ありてあり 成

こしきりたのては 因を考へた 冊二
毎晩少くは福備門子入つて来たのち 考へ時
あつては屋々として居たのをさうい 王岡の
解程文章は終りし左のものうーい 博と守
の川紙少人々石川昭高翁のうさう人けつ
たの、結て武向の事七 而して吾う獨終
ぬしは者と思ふ 何事も西郷隆盛翁を
けつたの 志程翁記をあらたけの昭高翁の
始めは彼の文章は見た時 年の若いと似
合ぬ筆づかぬ隆盛翁を 劉蕡したりのをあら

うと尤もなと云ふ翁翁國さま一ちが 漢
文も善く書いたりのでな
たふ硯友社の興ふはつて 弟二の勲捷
とちつたのち 因事外史と福備門の同時
の入学生をね識つたのでな 于城を石橋
雨香と云つてはき一た 是は私の林馬の
友の久我某が(九念ほ久我遠を毛さう) 昔
一益斗明なるほつて 久我子の大人が淡
書塾を弄りた居り一よお景子の通を一と
書の子を捕うんと二人一と屋振瓦成めく

り大目玉の流いたる事 ま 其の牛馬の友を
り五指とそお茶の水の師範学校を同言を
あらたなる 私小紹介したのて 凡か
其理由を才一私と好成同す 目面
白い人物を 何の 下 交際して 見然人とい
ふのを 何の 下 私 が また 少田
と 私 橋と 私 引成せ 先づ 橋 橋 子 義成 結
人 下 女 下 凡
其 好 小 少 田 を 其 何 下 一 橋 を 通 す 事
の は 詳 し 意 い と 之 下 の 也 駿河台館本行

の 橋 橋 の 師 範 引 成 した 石 橋 を 九 階 段
上の 今 の 暁 星 学 校 の 在 る 處 を 橋 下 の 下 凡
が 私 者 不 お 妻 其 何 下 通 つ て 居 た 少 田
とき す け く 親 密 子 に 下 つ け て 志 志 方 か
ら 通 下 の 名 石 橋 合 であ る 何 の 下 僕 の 心 不
言 高 下 の け 言 何 下 凡 と 少 田 が 言 つ て く
凡 の 下 下 凡 少 下 も 無 き 事 と 妻 子 居 成
其 を 師 範 出 た 少 田 の 書 音 を 八 景 の 向
て 一 下 其 下 机 取 お 對 する 橋 く 下 北 向 の
其 の 武 者 言 の 橋 下 向 の 志 志 方 つ 下 毎 日

文書の添でる (九巻目) ちーの文屋敷
口陰るを重宝い金であつた 尾崎の妻お
る右年二ニツ 山田のお三ツ四ツ 水仙
の干うらびのふ机のふ子持してあつて
外を老小法をいふ火鉢を座取り 髪を
二人の陽をや種がふう下でであつて ソウ
も強固する。ふうを 山田が言ふすむた靴
の中うら重宝成りおしと ちんちんものふ
すがらうでいふとと誘くをすうせうと 毛
向うを不似合ふべつ 甲冑の長煙草を煙草

やあつて 山田が長煙草をいふすむた
ら煙草下のすくおしととやうく突つて
居る 煙草が長くまうと三人を人ワシを
からたち取まを差子穿りしと此二人が
鼻を並ぶと居るお下 ちんちんお下
る 山田をお嫌いてあつたが ちんちん
自在のふをいふお下 四巻目お成り
した 處が徳備門お成り ちんちん見ると
ちんちん 斯道の好者の潜伏して居るのを
ちんちんお下と私とをちんちんお下

政……まどし、いふ大気端も有るたのどん
島へ或日乃捨ふ事也 唯^{たか}徳して居るのも
充^りうんぬか 練習の爲ふ雅語哉 振へるは
幸何いと云うがゆ 以り水も下地光取
ちうと同意哉しん 熟年を念ふ知照し
て同志の文章或草かゝると後法して 念ふ
成業集の事、事とちうたふ校る長る者 並
しを以の外に居る者も諸今つを 物勢二十
少人も得る事、たうが 其の思事光語備
門の学生でしん

今日よまうつと見ると 古の念々の三巻巻を
驚きき者也 其中死ていた者 行方不明
の者 喜信不通の者等があるが 知れぬ
長る今も 諸様職转入の高念も長る者
の一人(自分の事) 地方の判事が一人
三花分(董) 花子生りて(岡田泰心君) 工
学士が二人(池田健地君大澤三三君) 地方の
校長が一人(岡田隆山君) 生節伊佐今此
血が一人(高田香緑君) 以本館まで 騎長う
一人(安藤伴水君) 高館吾夜が築地(諸様職

と権臣(生絲を濠由難銭子)と云
又 造書者と造采と云 臣本利加 3 居る
者か二人(一 造采者ハ 兵多川 難臣 臣 造書者
ハ 地方の中を教ふか二人)

【某南の属官が二人】
大臣と権臣とを能り及が二人

【三品の在り陰以て樹成種くく居る
9が一人】 【石炭の臺は屋が二人
之我臺石君) まかく 有るが此と胸は
はまひ 先か造書同の書体か造つて居る

のぞん 而して後之理友此之と一を又増
ふまう左川上層山巖各ハ披ね見水蔭中お
流雁燈傳柳浪燈也と相あるが、ハ小面を是
此創之の陰を盡く未見の人であつたの
も亦一書と謂ふべきであらう事也

因てその難読と云上の是 半成兩歳也廿
枚の世枚綴合せし 云成我書多文庫と名
け 古の社多中より私歌程歌集句端唱渡

詩程詩用又俳文藝文新体詩 連も可少心
畫撰しもある 首の亦可也ハ從成揚け也

口画も挿画も何。是が総て所をのち
うと本るのて 少田を物字を上手に書ま
した 私を甚瓦歌い 筆耕を少田と私
とを分擔し瓦のてん 下龍の市を飾り
実務者が無うたので 玉尔少田と不持
と私との我載せたのでん 此三人以外に
丸田九幸とつや人がありました 此人を
也迄も書けり我神話も作し 古時既に
素人藝を志いと云ふ評判の版利で 我師
結 ~~も~~ 此師の甚力な故めて研究する處に

百枚ほどの叙事詩をも甚強く作つて
二三の劇詩もいふに 何れも 依樣我
々と同級でありましたが 後之言書を授
け得て 中途に下筆を擱して 今
不老自由を志し出て居りながら 祝友死
の為めを惜しい人哉 抑してろつたので
は 尤も本人のお為りな重なる結構を
つたのでしぐら (此は自注) 川平夢の志
り心をも言はて冷汗がけり 様を心持がす
るが 年一々修るを大に記憶の遺失が

三、 平水を礎に元創主の時を自分が己こ
高き幸臺を校へ移つて一まつた時を
紹く其在の時を己に 平水より一年後を
あるの時 是を其以高の文友念の時と混
同しこまつたの死と思はれる 平水の
う川と眉山君を創主の時を未だの人を
ある 其高より自高の句端の幸も思慕も
平水より其在時を

平水の友の要本に一名うり三日向函置きの
の控心 社名一冊一丸の文を するなり

右高を録筆を朱書を揮外に評多を力れる
其評也又及敷する者があるたとび
まゝの 南白のつたの時を河ります 此一
異改おしたりが吟次十八年の五月二日
に 毎月一冊の巻月を九号まで続きま
た ありと 地をを続々強くる 川上を念
紹を居りましたの時 以陸入死したの時
に 此を本御書本叶に居る 所格とを
進文了書の合意で 鶴橋門にも同時に入
るゝ丸のを河ります 長が 同好のすをある

と云ふ事を知らたうらたると見くも 且また勅
護も一たわつたのたけりましと 石山人
と云ふやを途う後と改りた名を 于延ハ
煙火少人 と云ふた 居ました 又此馬年の
揮画に担をた画を一人に 一人を積
翠(工)了士 古澤三之介 一人を緑英(松)了士
松尾証吉君) 積翠君を鉛筆画が恒意也
水彩画のも画き 器用を以て筆画も畫つた
経英を若音風 或善く畫つた 可 壽人画
には無いやをうりました さて 我々多文

庫の名が漸く素生百と知れ居るも奉たの
で 四方うと入会中申さむ 此画佳畫と
いふ語 たは 石橋の口福の様を言つて喜んを
居たのた此に下した 一冊の本を三四十
人しき見るとが各一人一日と一ヶ月
符もつゝので 亦れが各がうもまうぬ
と云ふので 様も誂れたのた何れ
即川しと鮎布す 舞としたいと云ふ程が
我々三名の習ふ迄つた 因で たは 今迄を毎
月三銭の金書であつたのが俄う二十銭

と引寄せて 四六版三十二頁の雅法
極う一了 討書で 播磨く此等
おとさる 稍有名許成法
時たると 喜二日 暇うぬ 程の 経書
石抄の 奔幸を 目録し 一よの 下一 五 出版
の 華ハ 一切 山田が 抄任で 沖田 今川 少路
の 金玉 出題 念此と 言ふ けり 掛合 以て 一 五
是ハ 山田の 前年 既ハ 一 二の 新体 詩集
公ハ 一 二 同念此と 綴つて 是ハ 縁ハ 一 五
ハ 抄出 した ので 此ハ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

念此 辭約の 八六 信也 印刷 した 事ハ あり ので
十 少田 名 既ハ 一 二の 新体 詩集
下 是ハ 山田の 前年 既ハ 一 二の 新体 詩集
正 是ハ 山田の 前年 既ハ 一 二の 新体 詩集
書 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百
うらた 少田も 活筆 新す へ 是ハ 山田の 前年 既ハ 一 二の 新体 詩集
下 是ハ 山田の 前年 既ハ 一 二の 新体 詩集
才 新 詩 集 と 云ふ の 柳 成 詠 一 二 七 言 絶 句
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百
注 然ハ 山田の 前年 既ハ 一 二の 新体 詩集

お新紙精選中を養生の部と云ふに
舛誤ありと云ふもまたこの少り物屋の引
物もたゞうゝ我書多し庫印刷前と云ふと
序 ありの二々条に全く失念しと云ふ
可
物雅法を出すに我を前と云ふ編輯の事
は山田と私とが別當にて 石持を云う所
秘紙扱ふを居たので 此の三人が署名人
と云ふ 以て十一年の春に改めを我書多
し庫印一號と云ふに改めた 是の四年の

十号と云ふので 表題は山田が録書と書
きまゝに 之が不載せし山田の少説が言
文一致で 私が見たのは言文一致の小
説は是の嚆矢と云ふ
あの雅法も九号には結まき 其の 信様
十号の下の怨むおれ 念多し 御布す 信を
け面白くまゝいなり 信成廉く 之を盡す責
ありて見るといつのので 今度、四六倍
の大形と云ふ 十二頁でいたの 十六頁
でいた 定價が三銭 小説の挿絵が二冊

入ルキ一た 之より先四六版時代は今一
人因忠が加けりま一た 横長の言 贈書頭
む坊の言うつ、と云ふ名 並名を志れま
一たが 妻人、一と名善く書きま一た
至後独立之行つを 今でも若松の製鉄所
と分る小居をすつたが 清島が詳より
一まきし

四六版より四元版の雑誌も移るとは大
名沢華が有のがはが 今では能く言ふま
人 印刷所も沼田町の半段にたつ同益社

と云ふのより易く、 並頂私を山田の志成
おと四番町の預成の志成、一と長ま一たが
う 石橋と討つを 同益社の志成、一
軒の家を借りて 之より我書多々津書り所
祝文記を著成りたので一た 雑誌
も親子書多々津書りたは、一と長ま一たが
之の、一と長ま一たは、一と長ま一たは、
うぬ 志成を贈書頭、一と長ま一たは、
二階成編輯室 下は、一と長ま一たは、
と、 石橋と私との交り、一と長ま一たは、

副合計掛成多き 田守長也多き 市内也
卸賣よりく著成備い 手替旭の巻了如く
てしに 外多敷もきりつたのを 雜誌も能
く巻れました 毎號三千元も刷る様も議
で ませぬめを 擴張すれむ非常子とのを
あつたの成 無勤言の面白半分を盡つて
居たはあふ 是ふ大事成去うせたと是
後ろを思ひ合ふれたの成
今度ふ一つ活し残つる居るのを 此所の
事なる 何れも雜誌成巻うるけんむりの

人と言ふのを 衆行日をも不格も私も範
の中へ何十部と詰めうのを 而して學校
へ出さ 休憩時間には控所の文藝の年成
奔走しを喜ぶるの成 其頃子習院の類
度して 古名高亭中子も合保して居ました
ふ 此つも持つて行つて推量成すの
ては 多生時代の不格といふものも言ふ
顔も顔うらたし 且前より習院も居た事
があらうのを 善く考へました 亦一其形
としものか 餘程可笑しい 石橋の鼻眼

鏡は掛けた合を振りしけること 其れを
着手の無いインバアススの鼠一倍袖の短
いの成 おき 雑沓成持つて廻る 私を又紫
ワボレと言ひしる 柳葉仕入の深返しの
紺へんたのふ 日吉へおると紫を子見へ
了奴成身して 外套は日蓮所物の星羅紗
成苗子返したるふ 重いボテくした
の成着を 理髪をちちやいのえよると
、絶叫する様を 巨島うらむる音觀であ
つたうとおひれる 庭庭風の中段に社
成設けしうらふ 石持と松とが一切成慶
理しを 少田は毎歳一篇の小説成書くが
うらふ 前の様子に對して 念を 園係
成持たるうらふ と云ふのは 少田をえま
用 おき 主成であつたが、 其の 配 おき 任 おき 言 おき ぶ
雑沓と靴穿するうらふ成汗まぬので 自ら志
ふらふ うらふ成あつたのを 何うも
進山人は成入社したのを 何と一六氣
の三男の子を人ありと聞くと 居たが 終成
見た事も無うつたのであつた所 社成の

つたうとおひれる 庭庭風の中段に社

成設けしうらふ 石持と松とが一切成慶

理しを 少田は毎歳一篇の小説成書くが

うらふ 前の様子に對して 念を 園係

成持たるうらふ と云ふのは 少田をえま

用 おき 主成であつたが、 其の 配 おき 任 おき 言 おき ぶ

雑沓と靴穿するうらふ成汗まぬので 自ら志

ふらふ うらふ成あつたのを 何うも

進山人は成入社したのを 何と一六氣

の三男の子を人ありと聞くと 居たが 終成

見た事も無うつたのであつた所 社成の

内と少人と善く識る者ありつゝ此人の
紹介で社中に加はる事となりたので
其の巖谷は往々協会学校に居たまへ
お坊さんの本人に好まふ少年で此れ
編輯室の本に9名を学校の帰途で
の制服を着て居ました此人は何でも十
三四の頃から読書が好きで喜書に居たの
で其の文章は又た目でも大人に及ぶと
九七巻の様におどろかした 後、巖谷も
此の初版の翻の事や言わして 此の人

物の志像と云へて居たので驚いたと言ひ
まに 甚だしく居たの聞きたいもの
ぶつか ちと遠方を今同令せし器も
ますせし(九花注) 以書が其の次第の書
いた9名 明後三十 年で 巖谷は古純
帯在中であつた外 其れを以て其の
とにうつてある) 巖谷の紹介で此れ
此れを杉浦氏の稱好せる所ける巖谷の
其の書と云ふのぞ 前巻の書

此語ます人は 須く千里の道成り之可
と 帝の好くを少川成致し 四方在り
かひす筆成取つを筆して居る すまもの 好者と 蕨
名うと噂のありたる人にて 始めて此子孫
けるは時は紺羅紗の古物織工托鉢僧の様
ち大なる冠つて 六歩成踏むやう不半は
やうに振らんて車たのぶに 文章成書く
とつふより先年 やうら 成取うさう不悦好で
手代水落亭と名乗つて居ました
物雅志をもちうく 臺にるのふあつたか

會計の不自給とひらう先御書に行うせは
おやち 親仁が道主さうよ見くく 言は甚尤太い
ぬであつたの成知うす居た為子 此奴
と能程とやう未事成るにの曲で
畢竟 あつち 臺掛の手法が疎略であつた為よ 甚
定今つを錢足りぬで 毎競屹々と印刷費
成拂つて行つたのや 餘之不滿意と書
て 二号 おやち 三号 おやち 四号 おやち と互に
有様 多しを左巻記が名不傳の身元成知
つと括り おやち 強ハ智信も考す 疑つて出

版の引寄せと居たのである 此雅法と世一
年のありやあるの出版で 月二回の発行
で 号も九号迄続いたので 採号うらま又大
の二部裁紙改めを (十月廿ある出版) 直敷
代係して 別表紙代付して 別指の指玉
代二枚刀紙を 本巻に十枚の上げました
表紙の朱指の古作者印護の様様で 形
は四六倍 然しと紙張を無うらなけり
表紙の手帳よりた物としてを 瓶とよお
表紙 如雅法といふ詳があらたのである 是

が我々もその序のオ四期で
オ三期とオ後の筆成執つた者も 美妙画
田草外史 丸岡九景 匡山人 和と五
人であつたり 存の古改良後は居山人と
ソお新字が加はつた 甚正 丸川上光折々
作文を多様するはありて ちと少説
け見せまうつたのでほうまに 所が十三
の巻刊子臨んて 破友我の爲に永く志す
べしとある一と妻妻が返つた 甚は我の
元老たる山田豆が脱走したのぞん (九

花江 脱走とを言ふ處評也 此の言
認す又言ふもい 一ツが所持と私よの此
の首領也言ふもいを非業であつた 何故
二山田が鼎足の盟成せつたうと云ふ
云より先山田は金帳堂より夏木三といふ
一冊成出給へた 是が文唱本を歡迎せん
たうぞん 此比教又言ふの好著といふ者
世間と地成拂うるものうた 一生気節の
あらた外也 甚愛へ山田の清新なる作物
の筆帳堂の言高た整本であつたう

読書死生が震い付たうと云ふものぞん
因で 金帳堂の如く此の年少詞人の
後才以識つて 重く用ひやると云ふ志也
正したもいと考へしる 此所金帳堂の
編輯を中根叔成が居たう 即ち此人
が山田の詞才を識つたのぞん 甚と此よ
一ちよと云ふ後雅法の気運の日増ふ熱し
事たを 此際何の憂りしやるといふ金
帳堂の計畫をあらたのぞん 早速山
田人素便が向つたものと見らる

此等を扱ひたり。那様事と云々も知ら
ず。山田も亦氣振りも見せたり。た
り。花注 此通うを自らも告げ 山田が悦
し。うえ 事成らんといふ事成れば思案二
人よりす。と 初めを驚いた信を 一うも
自らを以て前より 此等思案うへ たりも正繁
と 山田の事成訪問して 長たの信 復た之
の年の冬に 蕨落の花の葉落が 出来たり。た
り。 後して びたうた。たのを確々 自ら
一書早うたり。 此うの事成事へ 思案され

た事成二人より 治すれ。初めを 知つたの
て 夫は 我事多治りの 山田が 十後情待
人と 子より 二三冊 掲載され たいの
まゝ 福矢と筆が 執ら たいの ありと 信一
と 長た けれども 前も 言ひ かく 中段
の 社成 送り たり。 山田に 全く 社成 二
冊 下 以 治す あり。 社 成 の 事 成 山
田の 平素の 消息 社成 事成 たり。 且 今 社
此の際に 全 治す 事成 の 計 成 用 され 所 び 山
田と 亦 社成 と 疎を あり。 治す 事成 治す 事成

心が動いたのだん 昔の事を懐懐し
けれど心 考へて見れば無理の事いふ所
而して此間の事を硯友記の七ス上り
下とよと大よ味ありき一節だん
其内は金徳堂の云々の計畫うゑると云ふ
書が自よ刀つた 其前下達筆の少田が
思ふやうに筆移成書奉えんと云ふ懐懐
き事まが有つたので 迄は懐懐き難し
石橋と私と少田と筆を行きまへた
と云ふ金徳堂一節の語が有つた 硯友記

の国信成終ちたいうまふ口吻 其は直い
ワルど 文庫の連載してある小説の類
移成成送つてもいふたいと私に奉
託しん 然るに一向書奉えん 石橋が筆
ひき行つて達せん 和ノ下達成成かして
も返事もまい もう是迄と云ふのを私に
筆成取つて懐懐し絶交状成送つて 少田
と硯友記との縁を絶つたの花の義いと云ふ新
しくさきられたのだん 花注 少田
てうらまを硯友記成懐懐して 勿論

予等の云ふ通る金環堂との結託と生一
たうとおおききあひか 然し當時の少田とい
ふもの名をせん世故に馴れあひ所請お坊様
風で 心と底の底端石橋の如知也哉
振切つても 幸哉と承る人の事と幸と
しお程の卑劣な人向てを確りさうつた
それと此終文以後三四年して少一を面白
うとぬ風す一すへたが 昔の自佳人
て利の存りあはれ種福つて先居るもの
つた だが少田の事とてその様とす人の

う書めり少とも 多一存すも我撰
して目成りあつてを金環堂之行つと一まう
たといふ事 確々他々元因がある 元
心え少田と少田の亦該の人達との園信は
考へるに少をさうぬ 少水も長崎石橋川
とと自命の様々 常々訪問した者も大根
推亭に居られたが 少田の事とてうくまひ
が徳を事さすたの光 其力が出つて
居るのではるか ううと信する 事と成
孝りとも記すの名忍ひるいすト止るが

岸々美砂一人我妻との名不義そとて名あ
りまゐり 其れを以て後 うちまゐりて
思ひぬる人の 僅そ三四年七十年の間
嗚とりの思ひぬる言言を評判する
梅もあつたの老 何者の修成して其非
二階より又 願ぬ程に刺撃したのである
まゐり 此点老上と考へて見れば
之を以てあつてと思ふ 利目にて行つて
居ると程の花をうもつた 亦も之派
も此も 午橋をもあつた 而して巻物

少田の文章 博識なりき 敵もがトも云
書きをうた 彼の文章を確り二三
たゞと見た 其れを以て 評判で
きしも筆盡す 梅もあつた 我妻も
俄に月夜の提灯とあつた けりも
消えす 三十三十四十五 三十二年の二
日出版と持支へたが 其れを以て 評判
てつたのぞん 此感も 評判
程 因りあつた 一は印刷者の名 二は編
輯と合計との事務が 甚難しとあつた

伏学の片手向々餘りのと(三)は東洋の優
勢^{あり}を壁^{あり}したるべし 其の心をまねて
立たるやうなる事無うたべし 然し其
多きを収むる所が格あやういふ可^{なり}厭
まらつて了つたので 不格と私と連印を
同義にへと世田の日賦より二頁餘
同様の借用証交せられたる 其れを中隊の
所成用ぢと京轉したるべし 吉

此の吾年の末に私成務の事たるが 殊
田南重物所の吉成書院の主人 謹言七

吉田智太郎君より 私が文壇に立つて就
してを 前後三人の紹介者であるので
其第一が吉成君 即ち新著百種の
出版をす 第二は文士吉田早苗君
私の読書新すゝめゆゑに 第三は春陽
堂の主人故和田島を即ち 私の新すゝめ
したる後及び出版したる 其の吉成君
の集て 毎號一篇を載せるに就て雑論が
したるとして 吉成君の著る種と名け
て 私が初編を書く事と本つて 二十二

年の二月に名懺悔を志したの事
私か
考のや為る而会したのも
皇お表成誠つ
たのし
此の新著白種編輯の關係が
うぶを
そのゆゑ又此の編輯時代は四人
の執筆の得た
武井桂舟
種律柳浪
後
部と村
ゆゑ未だ一人故人を志つた中村
花雁
此人は我等多々座の第二期の役員
と入社して居たのをあふか
手雁の書い
た物成出されたらうた
此等は此年の先輩
とあつたゆゑ
歳と字正と呼ぶを居た

此年の二十縮界の事と信じて
座の志地
があつた
其時と大まか
秋田藩が成つた
居たのを
皆が無理子路の事と正し
了つたの事
前名を柳園と云つた
申
此秋すべし剣之の原と處を何れか
した事か
う
其の継つたを秋田の種よ
ま原と離
習考と云ふのが
あつた
那が名成事
瑞緒をあらうた
うと田
武井と
綴つたの事
新著白種の推測
か
行つたのが縁で
酷く怒る事
あつた

しきりたが 其始は画より一物に習はる
のて 其始は画より一物に習はる所の長屋
の版の家を見たりふ中上権つる居あか
ら大平書成抄べる元気が凡でむかつた
藤傳と知つたが廿一年の春にあつた
の 少年園の喜云が石田池の長蛇亭を在
つる 其の序として識る本つたのでした
藤傳が編輯主はあつた 其の序
其の序は二稿の史と名乗る石橋の
一と居る 藤傳が編輯主は下あつた

乙お登の始は二稿の史と名乗る石橋の
便つる本はのて 其の序を累卵の序洋
的悲憤文字と書つて長蛇の紙 石橋の
う破友社へ紹介して 後ふ新書の種
露少袖と云ふのが載せられた
その序は一時中絶した我書多文庫を
去る書はつた外に書いて見たりと云ふので
直に田島と云ふ 其序と改題して 形
菊版を立しめた 其は新書の種の一
がかるに 其もちく我力したので 我書多

天保の血闘である。志書は故種産翁の筆
で文昌星の画でした。是が前の発刊した
号は是より二十二号迄ありた。二十二
年の七月廿三日の志成代替りく（桂舟年
花鳥風月の通）大刷新と云ふ譯を奉つた
勢の西鶴成語吹したる此の時代で
柳屋 乙羽 眉山 水落ちど 志成書き
其日露伴の二氏も寄稿した。而して坤
画は桂舟が担者するまじ。前々の決との
う見ると強々墨色を常以て居ました。故

二之成亦六期と爲る。我々多々文種
の生命は亦六期を又姑と絶滅したる下す。二十
二年の十月前月の廿七号迄終刊して
一より名部の花があり。一より名本和語
が存つて。いふれも強々強敵。若くは元
も苦戦の後と聚れたのぞい。然し十一
月又考園書務所の催で。柳屋子成主筆
して。又文学と云ふ亦冊子成衆りした
是らも諸君。忍死の林園をいへま
した。柳もれと云ふ致し。忍死を取つ

てはゆ所なき要致であるか 以上文字も
亦九號より一號刊する故未(二十三年四
月)廿二年の十二月でした 皇村翁が類
壺形寸記成思ソた秋ソレ 和子ハ此セ
ぬと云ふ高田氏ソトの交渉セシたふ
五二徳じて 年丹子短編成書キキした
翌廿三年の七月と云ふと 未だ忘執の書
ハ中ノ也 又ハ江戶藩と云ふの成エシた
是ガ九号の雜處成論ハ凡ソと思フ也
隣也一 其年の暮十二号ノ一也 又彼

意之ガ為ニ無ケル一の憶案成百七十四
何ハ偽ル也 味ト考フ也 儂子ハ文字を
も思ハ此ノ様實ニ好ムと 其ガ初七期
是ガ八期也 未だ九期有る者ガ有
解ラ人ヲ知ラぬガ 今此等事ハ云フ也
合資組織ヲ云ハシた者也 此五記の様
圖と云ふの云々 昔年作志の爲をあら
凡ソ一 此も別ニ成書記トシテ 私の
是年亦ヲ發行シた 是ガ廿四年の一月が
初刊であつたが 例の九号も乃がす

て又罷めたりつたのです。少葉風草は、
の会々の中へおたのま。さるおたのま
泉鏡花が先づか。私に云ふ成扱つたの
は風草(毛頂坂草場)のちが早い
廿四年中の雑誌編輯の手で送つて云ふ
茲三年成短くおと九年のちがまん。愛が
此れの子が又不思議で。まは来春も成
つたう。又々午勢の率で雑誌界におつて
おやうと云ふ計畫も存るので。お九期
まを成りて十期の無いは甚だ勘定が要

いふ。是非お十期成造りたいと云ふ考
も存るので。
後々追記して見ると。此の九年向の祝友
記及び其の祝中の愛蔵は夥しいもので
書けりき書も澤山有る。書けりぬ書も
澤山ある。ちがく面白き書も有る。必
面白くある書も有る。成扱あり。失財あ
り。喜書あり。意書あり。一部の好む
説が、来るので。で又今後の成扱は
如何と云ふのも面白い問題で。九年の年

此^ニ據^リて居^ル私^ノの念^運も 本年^江後^を
空^勤也^生す^るを^あら^うと^念け^ルの^心を
祝^女代^の沈^華と^祝を^名 他^の如^く詳^し
く^説く^心得^を 茲^を終^へて^桂園^雜話^の末^に
遷^我略^叙した^ので 其^れも^一向^要録^成に
ま^せし^ば お話^成る^る用^意が^無う^らた^の
む^かう^と 是^を歴^年心^の内^免成^業う^ま凡^一

初 桂 前 編 終

また運年の身と汚りもつゝ人もの可^い来
つたの^こ下^り。 予^らと此の^ま筆^も 接

そ^の筆^をま^ま 思^ひ切^りて^は 名^を 神^める^の

本^に 筆^を執^り 却^り け^て 下^り 至^る 年^餘の

つ^ら 在^る 名^を 自^ら 名^を 長^い 理^由の

む^か だ^に 名^を 大^き 名^を 長^い 理^由の

意^を 交^へ 書^き 後^編 名^を 交^へ の^事

名^を 記^し 名^を 記^す

一^に 名^を 記^す 名^を 記^す 乃^は 名^を 記^す

山^田 名^を 記^す 名^を 記^す 川^と 名^を 記^す

巖^石 山^に 披^す 江^と 水^を 覆^ふ 岡^田 名^を 記^す 武^田

桂^舟 瀧^津 柳^垣 乃^は 名^を 記^す 中^に 名^を 記^す

名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

何^れ 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

つ^ら 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

一^に 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す 名^を 記^す

ら是れ月とめて更結（れんちん） ちんを儘の皆（れんちん）
 寸方せて更々筆成入ルるうらりの筆 互
 しい丘の中とせやると約束した所 づい
 くそ儘より置くろちあきまを不悦の
 高々羅つを とくく 墨成りせり有もふ
 乙京下の人とまうそしまつた 今方の初
 後の移がふ来つを断り書く中も亦
 の事成進あると涙の流む成禁一垣るい
 の下あり

一 初姓といふ名を 移成進一は即三十二

旨の正月であつた 寺節の事あて
 まし 題一たの心 別紙 何の事時とま
 の下あり

明治三年九月 二月

磯川 九華

（起） 凡そ 一葉森 霜巻
（雨） ののいれ

田舎の事、村舟、進、春、
（抄） 程の事

田舎の事、村舟、進、春、
（抄） 程の事

東の三年三月の事、
 九華の事



